

日本写真家協会会報

NO.170
(2019. Feb.)

■フォーカス 「著作権保護期間・死後 70 年の時代に!!」
■第12回 JPS フォトフォーラム開催
「テーマ、眼差し、写真の力」

JPS



Photo Kawashima Hiroyuki

SIGMA



プロの厳しい要求に応える、
フラッグシップ大口径望遠ズームレンズ

S Sports

70-200mm F2.8 DG OS HSM

希望小売価格(税別):190,000円 ケース、ロック付き花形フード(LH914-01)付、三脚座組込み
対応マウント:シグマ用、ニコンFマウント用、キヤノンEFマウント用

シグマの新しいプロダクト・ラインについては、こちらへ。

sigma-global.com

フィルムの「高品質デジタルデータ化」サービス

劣化や紛失が心配な大量のフィルム作品を デジタルデータで保存しませんか？

お客様の大切なフィルム作品をHasselblad Flexlight X5でスキャニング。さらにレタッチャーがその場で細かな調整を行い、高品質・高精細なデジタルデータに変換します。大切な作品を劣化や紛失で無くしてしまう前に、デジタルデータで永久保存しませんか。



Hasselblad Flexlight X5

＼アマチュアの方も歓迎／
プロのための「即日プリントシステム」
プリントから額装までトータルにサポート！



目の前でレタッチャーが
仕上げを行います。▶ 作品をその場で
プリントアウト。▶ その日のうちに
持ち帰れます。

※これらサービスは作業状況により、お時間をいただく場合または対応が困難となる場合もございます。
ご来社の際は事前にお問合せください。

[初回注文限定] のお得な3つのサービス

プリント料金
30%off

お一人様2枚以上のご注文に限り、A3サイズ相当（縦横合計800mm）を1枚無料で提供いたします。
用紙とプリンターの指定はできません。
用紙がなくなり次第終了。

A3プリントが
1枚無料

プリント料金にのみ割引が適用されます。
(額装は通常料金)

ピエゾグラフィー
2,160円～

お一人様1点まで、A4サイズ相当（縦横合計600mm）を上記の金額で提供いたします。
用紙とプリンターの指定はできません。
用紙またはインクがなくなり次第終了。

■ Gallery	JPS ギャラリー 佐藤真樹・松尾順造・中村卓哉、山村善太郎 竹中 勝、小柴一良	5
■ First Message	写真家はどこを目指すのか？	野町和嘉 11
■ Focus	著作権保護期間・死後 70 年の時代に !!	瀬尾太一 12
■ Exhibition	「日本写真保存センター」写真展 「後世に遺したい写真」～写真が物語る日本の原風景～	14
■ Zooming	第2回「笠本恒子写真賞」受賞記念展 足立君江写真展「カンボジアの子どもたちと写真×写真（連載 18）対極なす二つの写真展の記録	16
■ Archives	笠木絢子展シリーズ「地の愛」より「孝一の戦争と戦後」、奥村泰宏・常盤とよ子写真展「戦後横浜に生きる」	
■ Workshop	「日本写真保存センター」調査活動報告（29）	松本徳彦 18
■ Topics	写真の原点 肖像写真	
■ Report	著作権研究（連載 45）写真著作権の法的保護の歩み	大家重夫 20
■ Forum	賛助会員トピックス	22
■ Convention	竹内敏信さん・企画写真展・寄贈感謝状授与式	24
	奥村泰宏・常盤とよ子写真展「戦後横浜に生きる」	
	第12回 JPS フォトフォーラム 「テーマ、眼差し、写真の力」	26
	三人の女性写真家の物語 講師：大石芳野、田中弘子、安田 菜津紀 司会：佐々木広人	
	第44回「日本写真家協会賞」贈呈式 受賞者・「ソニーイメージングプロダクツ＆ソリューションズ株式会社」	31
	第14回「名取洋之助写真賞」授賞式 受賞者・鈴木雄介、やどかりみさお（奨励賞）	
	第2回「笠本恒子写真賞」授賞式 受賞者・足立君江	
	平成30年度会員相互祝賀会	
■ Digital Topics	急激な進歩を続ける クリップオントロボの進化	34
■ Report	セミナー研究会レポート 第2回技術研究会報告、	36
■ Message	第3回技術研究会報告（関西）、page2019 オープンイベント日本写真保存センターセミナー報告	
■ Books	Message Board	38
■ Comment	JPS ブックレビュー	40
■ Information	写真解説	43
	追悼 = 正会員・中川裕次、南 雄二、高橋延明、大野広幸、堀江克彦 ／経過報告／編集後記	44
■ International	日本写真家協会の沿革（英文）	46
■ Technical	エプソンのデジタルプリント最前線 ～プラグインでプリント操作を簡単に～ Epson Print Layout のご紹介～	54
■ Gallery	X ギャラリー 宮沢あきら、横山 聰、池之平昌信 表紙・川島浩之、表4・HARUKI	56

広告
案内

- (株)シグマ
 - (株)アフロ
 - ポートレートギャラリー
 - (一社)日本写真著作権協会 (JPCA)

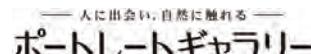
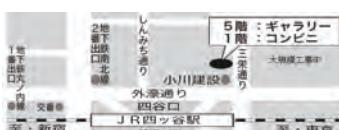
- (株) 堀内カラー
- キヤノンマーケティングジャパン(株)
- (株) タムロン
- (株) ニコンイメージングジャパン

- リコーイメージング(株)
- エプソン販売(株)
- 富士フィルム(株)

〈写真文化の発信基地〉みなさまの作品発表の場としてご活用下さい。



ポートレートギャラリーは、全国の写真館やスタジオからなる一般社団法人日本写真文化協会により、写真文化の普及、振興、そして育成を目的に運営されています。



■JR 四ツ谷駅・四ツ谷口 徒歩3分 ■地下鉄丸ノ内線1番出口 徒歩5分
■地下鉄南北線2番出口 徒歩3分

一般社団法人 日本写真文化協会

〒160-0004 東京都新宿区四谷 1-7-12 日本写真会館 5 階
TEL : 03-3351-3002 FAX : 03-3353-3315
URL <https://www.sha-bunkyo.or.jp>



鳥居焼聖火隊——佐藤真樹
写真集『大善寺』



黒島天主堂——松尾順造
写真集『天空の十字架』



タイマイ——中村卓哉

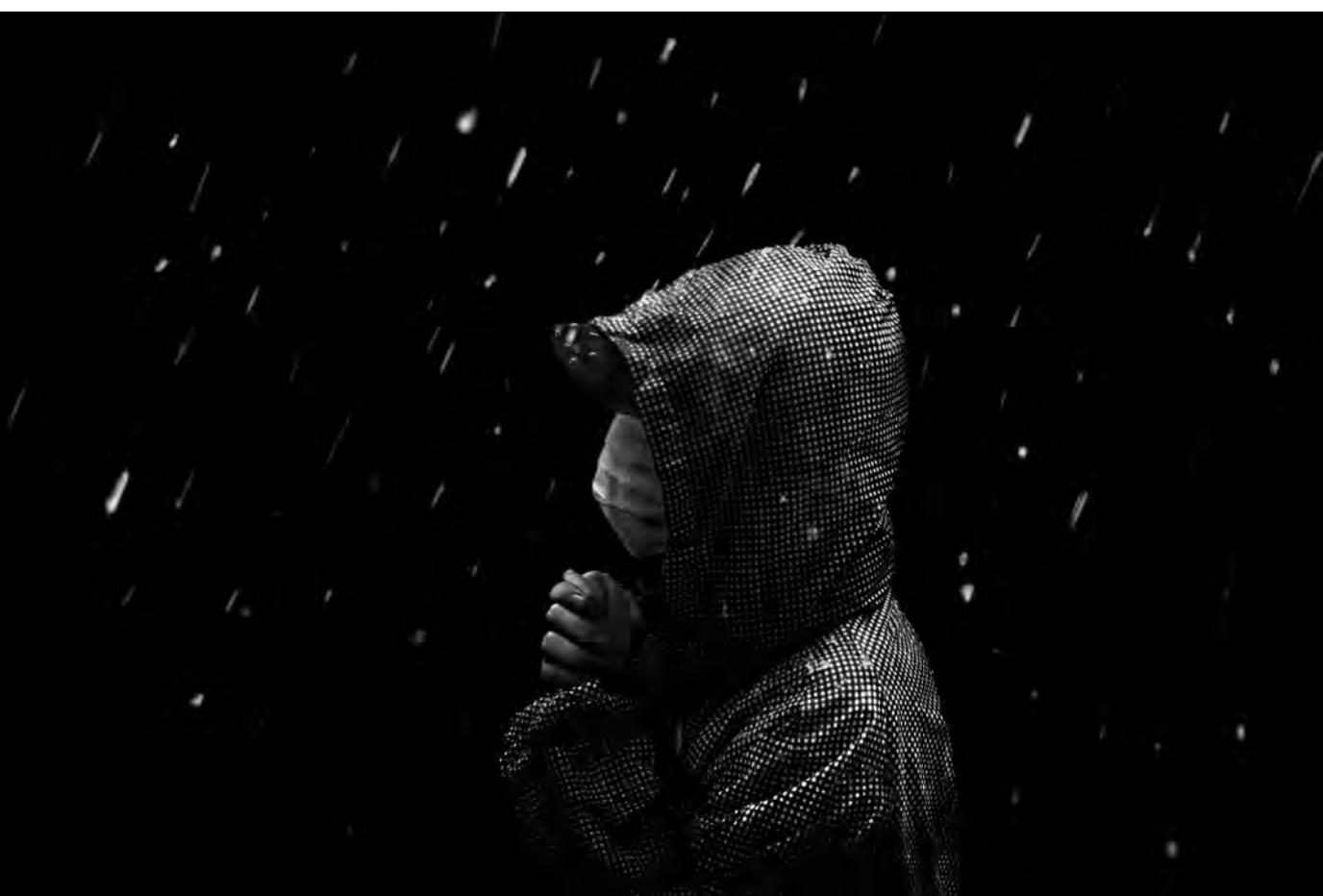
写真集『辺野古－海と森がつなぐ命』
写真展「海と森がつなぐ命－辺野古」



江差町鳴島（かもめじま）瓶子岩「へいしいわ」——山村善太郎
写真集・写真展「悠久の日本人のこころ磐座」



沖縄本土復帰から 46 年その光と影の記録——竹中 勝
写真集・写真展「沖縄その光と影の記録」



祈り 小柴一良
写真集・写真展「FUKUSHIMA 小鳥はもう鳴かない」

写真家はどこを目指すのか？

副会長 野町 和嘉

最近十数年間に起こった写真と写真家を取り巻く環境の変化は、過去に例のないものだ。

2000年代初頭から急速に進化したインターネットにより、それまで国境で隔てられていた国単位の写真市場が、デジタル通信が結ぶあらゆる情報とともに、ボーダーレスになった。ところがそれから10年も経つと、SNSが世界を席巻し、格段に進化したネット空間において龐大な情報が溢れ出した。映像情報はただで手に入れるものという社会通念が行き渡って、グラフメディア等の印刷物は軒並み読者を失い、弱体化していった。写真家たちは、それまで撮りためてきたカラースライドのデジタル化を、当初は積極的に進めていたが、商売には結びつかないことが判明し、意欲を削がれていった。

加えてスマホの撮影機能が劇的進化を遂げ、いまや動画も含めて映像は、誰にでも撮れ、SNSにより、瞬時に世界に向けて発信できるとんでもない時代になってしまった。こうして急速に肥大し巨大メディアと化したSNS上では、インスタグラマー、ブロガーと称される職種が生まれ、おそらく既存の写真界を凌駕するかも知れない市場に育ちつつあるはずだ。いやすでに超えてしまっているだろう。

さらには劇的に増えた旅行者が、高性能デジカメを駆使した写真撮影の楽しさを覚え、今や多くの旅行者にとって、旅の目的が写真撮影となっている。こうして秘境、辺境の隅々まで踏み込んで撮影されたおびただしい写真が、使用料など気にしないままマーケットに溢れかえり、部数減少により大幅な経費削減を強いられた出版社やネットメディアにより、信じられないような安価で取引されているのが現状なのである。おかげで従来からのストック写真市場はほぼ崩壊してしまった。

レストランなどで、出てくる料理を、まばたきを

する程度の感覚で次々に撮影している女性たちを見ていると、写真が難しいなどというハードルは皆無であることを悟らされる。

昨年暮れに、旧友である日系のナショナルジオグラフィック写真家が来日し、1年ぶりに情報交換する機会があった。インスタグラムで150万人のフォロワーを持っているこの写真家には、インスタグラムでの発表を条件に、何社かのクライアントから撮影依頼が定期的に来ている。150万人の顧客を持つ個人商店という店構えなのである。ナショナルジオグラフィックというブランドと連携していることで、国境を越え世界に拡散してゆくこの方式は、日本というローカルな視野でやってきた多くの写真家にはハードルが高い。さらに、スマホ画面でインスタ映えを意識せざるを得ない絵作りに集中することへの抵抗もある。いずれにせよ、150万人のフォロワーを飽きさせなくつなぎ止めておくために、その友人も相当な努力を強いられている様子だった。

さて、長年にわたって、撮った写真を紙に印刷することで対価を得てきたわれわれ写真家は、紙の使用頻度が激減してゆく現状をどうやって生き延びてゆくのか？ 著作権にこだわるあまり、ネット発信とは一線を画したやり方が今後も通用するのだろうか？ 発信をしても映像洪水に呑み込まれ、一瞬のアブクと消えてゆく儂は拭えない。いずれにせよ、映像を取り巻く環境が、これまでの何倍ものスピードで予測のつかない方向に変容していくことだけは免れないであろう。

それでも、およそ見尽くしてしまった世界の中で、独自の視点を頼りに撮り続ける以外に写真家が生き延びる道はないのである。

私自身、まだまだ写真の力を信じているし、現状をただ悲観しているわけでもない。

著作権保護期間・死後 70 年の時代に!!

瀬尾太一（日本写真著作権協会常務理事）

2018年12月30日に、写真を含む著作物の著作権保護期間が、それまでの死後50年から70年に延長されました。正確には、著作権法は改正されていたのですが、その施行がTPPの発効と連動していたために、TPP11の発効とともに施行された、ということになります。これにより、例えば30歳で撮影した写真について、その写真家が80歳まで生きたとすると、生前の50年(80歳マイナス30歳)と、死後の70年を合計して、約120年間、著作権が保護されることとなります。非常に長い著作権保護の時代に入ったと言えるでしょう。

1) 著作権を死後 70 年間許諾するためには

このような著作権の保護期間の時代に、最も重要なことは著作権の管理です。特に著作権者である撮影者の死後70年間は、誰が管理することになるのでしょうか。30歳で子供が生まれ、80歳で撮影者が死亡したとすると、その時点では子供は50歳です。そしてその子供が30歳で撮影者の孫を産んでいたすると、撮影者の死亡時、その孫は20歳になっています。そしてその孫ですら、保護期間が満了する更に70年後には、20歳プラス70年で存命であれば90歳、ということになるのです。

まさに「著作権は誰が管理するのか」ということが最も重要なテーマになってくるでしょう。生前から数世代を超える超長期間管理することを前提にして、著作権の保持を考えていないと全く管理が不能となってしまうことが予想されます。さらに問題を難しくしているのが日本の相続制度です。管理すると同時に、著作権の相続を確定していくないと、遺族全員に著作権が分割相続されてしまいます。図-1をご覧ください。

この試算では、何と7世代、96人にも及ぶ著作権者を生むことになってしまいます。これでは著作権を許諾することもできず、そもそも、誰が著作権者なのかすらわからなくなってしまうでしょう。

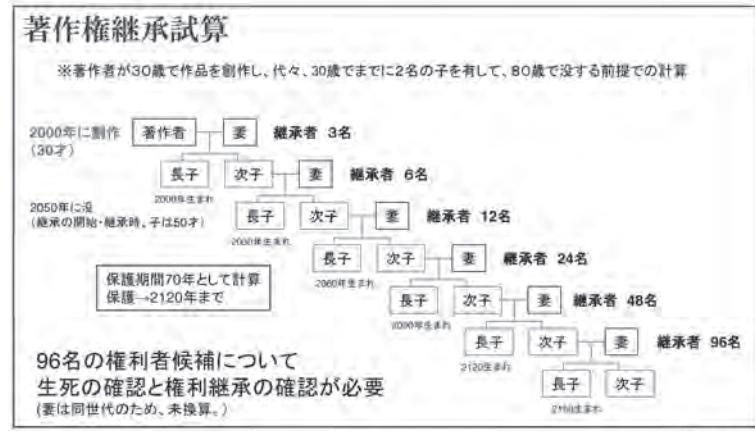
このような状況を招かないためにも、写真著作権の管理が重要です。管理とは許諾を行える継承者を常に特定していくことであり、そしてその継承者に著作権が集中して継承されることを証明することができる、ということです。このことが処理されず、誰が許諾を行えるのか、また、その継承者が本当に著作権を持っているのか、ということを確定していなければ、著作権処理が出来ずに、利用者はその写真を利用することが出来ず、また、遺族も権利が拡散してしまって、許諾出

来ない状態になってしまふ、ということです。

2) オーファンワークスの増加

「オーファンワークス」とは一体何でしょう。これは「オーファン(orphan 孤児の意味)」になってしまった作品のことを指し、著作者を親に見立てて、著作者が不明となってしまい、利用不可能となってしまった作品を指します。前述のように、著作権の継承管理が行われなかった場合、その作品は許諾を得ることが出来ず、大変多くの著作物がオーファンワークス化するとみられています。実際、写真家の実態を考えてみても、個人が100年を超える期間、写真著作権を管理することはかなり難しいことでしょう。ましてや、直系の継承者がいない場合など、権利者自体の所在すらわからなくなってしまう場合も少なくありません。このように著作権者が不明となり、オーファンワークスとなってしまう状況は「オーファンワークス問題」と呼ばれ、今回の著作権保護期間が70年に延長されたことを機に、社会問題化してきています。

この問題は、利用者にとって不幸であると同時に、写真家にとっても大変不幸な状況です。許諾を得られないために、オーファンワークス化した写真は、まったく利用することが出来ずに埋もれていってしまうのです。オーファ



ンワーカスへの対応は、著作権の保護期間が70年に延長された時代には、利用者が解決する問題というよりは、著作者が解決する問題です。自ら利用の方法を決定し、著作権を管理することが著作者の義務になったと言えるでしょう。前述の著作物の管理について、業界を挙げての取り組みが期待されます。

3) 積極的な利用の促進

基本的には、写真家は写真著作権を保持し、それを管理し、社会に役立てるとともに、経済的な利益を得ていくことが必要です。このため特にオーファンワーカス化しやすい写真分野では、個人がどのように管理していくのか、また、写真家団体がどのように関与してそれを補助していくのか、真剣な取り組みが必要とされています。

しかし、子供がおらず、継承する人がいない場合も、昨今の状況では少なくありません。また、管理する労力に比べて、写真が利用された時の経済的な利益が少ない場合もあるかもしれません。このように著作権を将来管理しきれないことが予想される場合もあるでしょう。特に写真は継続して撮影してきた場合、膨大な量となるために管理負担が大きくなります。そして何の手段も講じなければ、多くの場合は著作権者が不明となり、写真は誰にも利用されなくなります。

写真は時代の記録です。写真は経年によって、その記録性が重要性を増し、鑑賞目的のみならず、情報としての価値を得ていく表現方法です。写真はこの稀な特徴から、実は撮影後、100年などが経過した時にこそ利用されるべきものだと言えるでしょう。

では、このような写真の利用について、どのように考えていけばよいのでしょうか。

まず、最大の原則は、著作者、つまり撮影した写真家がその利用方法について方向性を持つことです。つまり、撮影者がその写真をどうしたいのか、自分の死後、写真をどのように扱っていきたいのかをはっきり文章で示すことが重要です。またこれと同時に、自分の写真のメタデータ（撮影地、撮影日時、対象に対するコメント等）を整備して、写真を整理してください。このことにより、利用が格段に促進されます。メタデータの無い写真は、どんなに貴重な写真でも、時間経過によってその価値を増すことはありません。そしてこのメタデータを付与することは、撮影者のみが可能な作業なのです。後付けのメタデータは、よほどどの確証がある場合を除いて、「推定」のメタデータであり、価値は大きく損なわれます。

そして次に、すべての写真を将来にわたって管理していくのか、それとも一部の写真を選定して管理し、それ以外については、一定の期間を定めて、ある程度自由な利用に供するのか、すべて写真家が生きているうちに決めておく必要があります。このことによって、写真家の写真は経済的な価値と同時に、社会的な価値を得ることができます。

るでしょう。つまり写真の利用の方法は写真家が明確に指定する必要がある、ということです。

4) 写真家の使命が問われる時代

何のために写真家であるのか。もちろん経済的な理由のみで写真家である人もいるかもしれません。しかし、多くの写真家は、写真を通じて真実を社会に知らせるとか、写真を通じて世界の美しさを伝えるとか、何らかの「表現」のために写真を撮影しているのではないでしょうか。写真は公表されて初めてその価値を持ちます。そしてインターネットの時代になり、過去とはくらべものにならないくらい容易に、写真を公表することが出来るようになりました。

しかしこの環境の進歩は、写真を最も埋もれてしまいややすいメディアにしてしまったとも言えます。多くの写真が日々公表され、そして人々の眼から埋もれてしまっています。100年後に大変重要性を持つかもしれない写真も、現時点で最も価値を持つ写真も、そしてただのメモでしかない写真も、すべてが混在して秋の枯れ葉が積もり朽ちるよう、堆積して消えていっています。

通常で考えれば、今回の著作権保護期間の延長は、権利者にとって大変喜ばしい改正です。しかし写真メディアにとっては、写真を埋もれさせていくことを加速させかねない、負の側面を持っています。こんな時代に写真家は写真の価値を保全し、将来に向けて、写真というメディアの役割を高めていく必要があるのではないでしょうか。この保護期間延長のメリットを最大に享受するためには、前述のような写真の利用促進に、写真家自らが真剣に取り組む必要があります。AIが写真を自動で撮影し、更に動画の画質が向上して、動画の切り出しで写真の代用が可能となってしまう時代に、「撮影者」という人間の意思を反映した写真行為の在り方が重要になってくるのです。それは具体的にはこれまでのような撮影と同等の作業として、「管理」という作業が、写真家の重要な作業となってきたということを意味しています。

著作権保護期間の延長は写真家に大きな命題を与えた。何の対応もなしには、写真家へのメリットは限りなく薄いばかりでなく、負荷すらかけかねません。しかし、写真家が自ら利用促進に取り組むならば、将来にわたって大きな利益をもたらす可能性を持ちます。この改正を機に、写真家が新しい時代に踏み出していくことを願ってやみません。

瀬尾太一(せお・たいち)

写真家 2002年から文化審議会著作権分科会委員（現職）、文化庁各小委員会委員等を歴任して著作権行政にかかわる。（一社）日本写真著作権協会常務理事、（公社）日本複製権センター代表理事・副理事長、（公社）日本写真家協会著作権委員会委員。

日本写真保存センター写真展 「後世に遺したい写真」 —写真が物語る日本の原風景—

2018年10月25日(木)～11月24日(土) 光村グラフィック・ギャラリー

日本写真保存センターの収蔵する作品を展示し、日本人の歴史を振り返る写真展「後世に遺したい写真」—写真が物語る日本の原風景—(主催:公益社団法人 日本写真家協会・日本写真保存センター/共催:光村印刷株式会社/後援:品川区・公益財団法人 品川文化振興事業団/協力:一般社団法人 日本写真著作権協会)が、10月25日(木)～11月24日(土)の約1ヶ月にわたって、品川の光村グラフィック・ギャラリー(MGG)で開催された。

同展は、日本写真保存センターが保存している30万点に及ぶ写真原板の中から、明治～昭和にかけて撮影された日本人の暮らしぶり、国宝や重要文化財を記録したモノクロ写真約100点を選び展示した写真展だ。今回は、品川区・公益財団法人 品川文化振興事業団の後援を得ての開催ということから、CP+2018の特別展示「後世に遺したい写真」日本写真保存センター写真展(みなとみらいギャラリー)の展示作品に加えて、品川区にゆかりの深い写真家、笠本恒子、若目田幸平、諸河久の作品と品川区立品川歴史館所蔵の中村立行の作品も展示されていた。

ちなみに日本写真保存センターには、明治・大正・昭

和の日本人がどのような暮らしをしてきたのかを記録したフィルムがおよそ10万点収蔵され、データベース化されて利活用できるようになっている。

展示作品は、明治～昭和期に日本人が経験してきた戦争や事件、様々な自然災害などを捉えた、名作として知られている作品だけでなく、初めて目にするような貴重なものも紹介され、様々な角度から楽しめるものとなっていた。また、会場には写真家協会の会員が常駐し、必要に応じて作品解説を行っていた。当時の日本人の生活感がしのばれる作品が多いこともあって、来場者も1点1点時間をかけて見ていくという人が多かったのが印象的だった。

10月27日(土)には、天野太郎氏(横浜市民ギャラリーあざみ野主席学芸員)と松本徳彦副会長を講師に迎え、「残された写真から何を読み取るか」をテーマにした講演会を開催。こちらも大勢の来場者で賑わった。

日本写真保存センターの活動を広く一般の人に紹介する上でも意義のある活動ということで、今後もこうした展示を企画し継続してもらいたいと思った。

(取材／出版広報委員 柴田 誠、
撮影／柴田 誠・松本徳彦)



会場の光村グラフィック・ギャラリー(MGG)入り口



ゆっくり時間をかけてご覧になる来場者が多く見られた



明治・大正・昭和の日本人の暮らしを伝える作品約100点が展示されていた



戦争の悲惨さを伝える昭和期の作品は、特に来場者の関心を集めていた

第2回「笹本恒子写真賞」受賞記念展 足立君江写真展「カンボジアの子どもたちと」

2018年12月20日(木)～12月26日(水) アイデムフォトギャラリー「シリウス」

第2回笹本恒子写真賞の受賞を記念した、公益社団法人日本写真家協会主催・足立君江写真展「カンボジアの子どもたちと」が2018年12月20日(木)から26日(水)まで、アイデムフォトギャラリー「シリウス」(東京都新宿区)にて開催された。

笹本恒子写真賞は、日本写真家協会が報道写真家として活躍した笹本恒子氏の業績を顕彰し、その精神を受け継ぐ写真家の活動を讃え、助成することを目的として創設したもので、今年度が2回めの授賞となる。

今年度の受賞作となった「カンボジアの子どもたちと」は、永く続いた戦争によって荒廃した国で、健気に生きる子どもたちの姿を捉えた作品群。そのすべてが、生きるために農村や市場で働く子どもたちの姿を捉えており、子どもたちの純真な表情や澄んだ眼差しが印象的だ。

足立さんがカンボジアで子どもたちの撮影を始めたのは2001年のこと、すでに和平合意から10年以上が経過していたが、復興は遅れ、国土の姿は荒れ果てたままであったという。



展示会は新宿区の「シリウス」で7日間にわたり開催された



写真展は足立さんのカンボジアでの18年間を集大成するものとなった

「荒れ果てた国で、子どもたちは皆、生きるために働いていました。戦争という負の遺産を、どの子どもたちも背負わされていました。国は荒れ果てていて貧しい。けれどもその中で生きている子どもたちは、誰もが純真でした」と足立

さんは振り返る。

「カンボジアには18年間通いました。現地で初めて会った子どもたちは、今はもう大人になって、それぞれの仕事に就いています。私は、子どもたちと触れ合い続けたことで、あの国の社会の移り変わりぶりを見つめていたということにもなったのだと感じています」と足立さん。

戦争という愚かな行いによって荒れ果ててしまった国に生まれた子どもたち。生きるために、子どもたちは何を想い続けていたのだろう。レンズと向かいあう子どもたちの表情は明るい。その穢れのない眼差しが、私たちに生きることの意味を改めて問いかけてくるかのようだ。

(記・撮影／出版広報委員 池口英司)



初期の作品はモノクロで、近年の作品はデジタルによるカラーで撮影されている

主催：公益社団法人日本写真家協会
第2回「笹本恒子写真賞」受賞記念展
「カンボジアの子どもたちと」
足立君江 写真展



展示作品をバックに足立君江さん
さんは振り返る。

対極なす二つの写真展の記録

河野和典 KOUNO Kazunori (編集者)

新年最初の記事としては昨年を振り返るよういでいさか気が引けたのだが、未だにずっと頭の中で確固と存在しつづけている貴重な記録写真なのでここに記しておかなければならぬと思う。それは、昨年1~2月に銀座の藍画廊で開催された笠木絵津子展と、片や10~12月に横浜都市発展記念館で開催されたおしどり写真家として活躍された奥村泰宏・常盤とよ子の写真展である。会期が昨年の年始と年末というのもさることながら、写真の分野が、笠木がデジタルを駆使したインクジェットプリントによるフォトコラージュであり、奥村・常盤が銀塩モノクロームフィルムによるドキュメンタリーと、対極をなすものだ。そればかりではない、笠木の記録・表現は親と自分との個人的関係を表すものだし、奥村・常盤の記録・表現は、終戦直後の横浜における社会的状況を表すという違いはあるけれども、元はといえば、当然ながら自身の思考に基づく記録であり表現であることには両者の違いはない。

■笠木絵津子展シリーズ「地の愛」より 「孝一の戦争と戦後」

(2018年1月29日~2月3日、銀座・藍画廊)

笠木絵津子(1952-)の経歴は、写真を撮る人としてはちょっと変わっている。

1952年兵庫県尼崎市に生まれ、1960年父の故郷である姫路市へ移る。1971年に県立高校を卒業すると奈良女子大学へ入学し大学院理学研究科物理学専攻修士課程を修了し、さらに1977年には京都大学基礎物理学研究所文部教官助手となり、研究所を退職後フリーカメラマンとなったという。まことにめずらしい。その彼女の写真表現とは?

「父の一生を古写真と現在写真で描くシリーズ第3弾。父が語った軍隊時代と戦後のエピソードを基に父のアルバム写真的地を歩いた。父の歴史と私の旅



を重ねて、和歌山、姫路、神戸、芦屋を舞台とした大画面デジタル作品4点を展示します。」と案内のはがきにあるように、四角い会場の1辺に、いずれも天地が110cmに対して左右が500cm、330cm、303cm、520cmサイズの大パノラマ写真4点が掲げられた(別室に5点の小型プリントも参考展示)。

笠木絵津子のデジタルによるフォト・コラージュの特長は、基本的には父孝一が滞在した場所へ笠木が行って撮影した現在の写真に、父のアルバムの古写真を配置するというコラージュである。前回展(銀座・ギャラリーナユタ)の主に母のシリーズ「時空写真論」、前々回展(銀座・小林画廊)の父のシリーズ第2弾、さらには作品集『私の知らない母—ふたつの時間を持つ写真』(2008年、私家版)を見てもその手法は一貫している。写真は時間と空間の芸術といわれ、通常写真1点に時間と空間をそれも瞬間に凝縮するが、笠木は様々な時間と空間を1点の中に散りばめ、そして凝縮する。これによって、今回展ではたった4点にもかかわらず終戦間際から戦後の父のストーリーが一篇の映像として展開する。



「昭和20年7月頃、孝一、和歌山にて軍事訓練中、和歌浦らしき海の見える場所にて米軍機と日の丸機を撮影する」

その重層的に増幅したパノラマ写真は迫力はもちろんだが、文字通り深みがあって、両親の生と死に共鳴するような笠木絵津子の“生命のリズム”といったものを感じさせられる。そこには女性としての両親への想いが並々ならぬ優しさに溢れているようで感動させられる。プレスリリースには「生死を彷徨った軍隊時代の父と、小学生に囲まれて大笑いする父の間はわずか5年、この落差の中に命の煌めきを見て制作に励んだ」とあった。



笠木絵津子作品集『私の知らない母』(2008年、笠木絵津子事務所)

■奥村泰宏・常盤とよ子写真展 「戦後横浜に生きる」

(2018年10月6日～12月24日、横浜都市発展記念館)

横浜は戦前より日本の国際港として活気のある港町の1つであったが、戦後は連合国軍の部隊を統括する米軍の司令部が置かれ、広範囲の地域が米軍に接収され激変することとなった。この終戦直後の横浜を余すところなく克明に記録したのが奥村泰宏と常盤とよ子のおしどり写真家であった。

奥村泰宏(1914～1995)は横浜の老舗燃料商・奥村商会の家に生まれた。当初は文学を志したり、演劇に傾倒するがうまくいかず、1937年にカメラに出会って生涯を通じて撮影活動に取り組むこととなったという。その写真活動では主に、戦後横浜の接収状況、占領軍の横顔、横浜市民の状況、港に集う人々、さらには戦争孤児を中心とした子どもたちの様子を捉えている。いっぽうの常盤とよ子(1928～)は、神奈川区の酒問屋「常盤屋」の家に生まれ、裕福に育つ。1945年5月29日の横浜大空襲で父をなくしている。その後、東京家政学院を卒業し、兄のラジオ放送事業を手伝いアナウンサーとして活動するが、奥村と出会って写真家の道を志すことになったという。その活動は奥村とは違って、働く女性、それも新しく誕生した女子プロレスラー、社会的には



奥村泰宏・常盤とよ子写真展「戦後横浜に生きる」チラシ

疎まれ冷たい目で差別された赤線地帯の売春婦をシリーズとして取り組んでいる。中でもチャブ屋(外国船の高級船員向け妓楼)で働くお六さんを捉えたユニークなシリーズは彼女の代表作とも言われている。

奥村の写真がマクロ的に横浜の状況を客観視するようなドキュメンタリーとすれば、常盤の写真は、女性ならではの、男性ではとても入り込めないところまで踏み込んで粘り強く撮影するのが特長的である。敗戦によって一変した戦後社会で、表現は悪いが、男社会の尻拭いをするかのように苦悩して働く女性の姿にある意味、共鳴するかのように、あるいは寄り添うように、そのショットには常盤の優しさを感じられる。ほかでは見当たらない女性を代表する見事なドキュメンタリー

と言えるだろう。そしてこの常盤とよ子の写真は、横浜に限らず戦後日本の混乱期を、それも働く女性の苦悩を象徴するものとして写真界では全国的に脚光を浴びることとなったのだ。

私が奥村を知るのは1970年代に入ってからだが、すでに横浜を代表する写真家の一人であった。常盤については、もう20年近く前(1999年か2000年頃)になるが、横浜のある写真家の集いに呼ばれてお目にかかったのが初対面であった。印象深いのはそのとき、「土門拳さんから褒められたのよ」と誇らしげに語っていたのがとても印象に残る。奥村はすでに亡く、常盤は昨年90歳を数え、今は入院中と聞く。今展は、二人の作品が横浜都市発展記念館に収蔵された記念の回顧展であった。

最後になるが、今展を取材するにあたり、二人をよく知る横浜の写真家で、写真集『昭和30年代の神奈川写真帖』(2007年、アーカイブス出版)で奥村や蘭部澄と共に活動された小川忠宏さんにご協力いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。



写真展「戦後横浜に生きる」図録表紙:「帰還兵とGI」 1950年、奥村泰宏撮影



写真展「戦後横浜に生きる」図録表紙:「真金町妓楼の仕度」 1957年、常盤とよ子撮影

「日本写真保存センター」調査活動報告(29)

写真の原点 肖像写真

松本 徳彦(副会長)

2019年は、フランスのルイ・ジャック・マンデ・ダゲールが1839年にダゲレオタイプを発明し、その技術が公認されてから180年になる。ルネッサンス以来、西欧の王侯貴族や富豪たちは、自分の肖像を画家や彫刻家に作らせて、その姿を絵画や彫像で永久に残そうとした。

19世紀になって写真術が誕生し、瞬時に風貌を写し撮る新しい技術に関心が強まる。しかし、発明当時の撮影料金は相当に高価で、しかも露出時間が長く、直射日光下でも撮影に10分から20分かかるといったことから、さほど普及しなかった。その後レンズやカメラ、感光材料の開発が進み、写真が記録メディアとして有用であると認知され、写真家も増え料金も廉価となって、一般大衆に受け入れられるようになったことで、誰もが容姿を撮っておこうと、ポートレートスタジオに足を運んだ。さらに印刷媒体の発達が拍車をかけ、人物写真への関心が拡大した。

写真の記録性の活用は人類の歴史遺産である古代遺跡の発掘調査をはじめ、産業や科学分野、交通手段、国土開発の分野へと利活用が急速に進む。戦争や軍事目的への活用、日常生活での利用へと拡大。20世紀に入ると富裕層の一部にアマチュア写真愛好家が生まれ、写真の大衆化がますます広がる。

わが国では戦後になって写真文化が普及し、高性能なカメラが次々と開発され、印刷文化の発達とともに、カメラの大衆化と愛好家の増大で写真業界は大いに潤った時代もあったが、バブル経済の崩壊と携帯電話、タブレットなど通信機器の普及が女性やお年寄りまでに浸透し、写す、すぐ見られるという便利さが受けた、誰もが写せる、利用する総カメラマン時代が到来している。

■生涯を肖像写真に心血を注いだ片山撰三 (1914~2005)

福岡市の中心部天神にほど近い中央区役所そばに、
瀟洒な洋風スタジオがある。片山撰三は1912(大正元年)から続く老舗の営業写真館を継承し、戦後は、家業の営業写真活動だけでなく、昭和を代表する文化人を撮り続けながら、福岡の名刹觀世音寺や大分臼杵の石

仏の記録、さらに54(昭和29)年には沖ノ島遺跡(宗像神社沖津宮祭祀遺跡)の第一次調査団に加わり撮影をするなど、端正な仕事振りが評価されて貴重な作品を数多く残している。

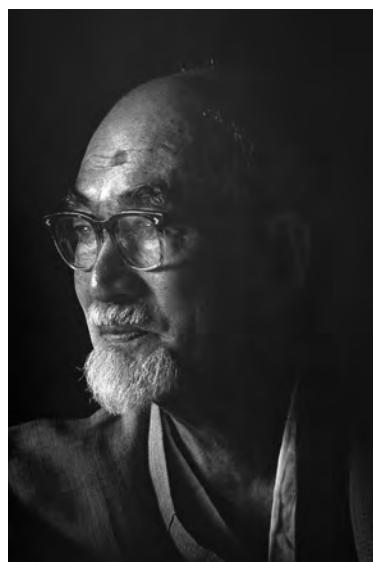
2018年暮れにご遺族からの依頼で、氏が撮影されてきた数々の文人、画家などの文化人の肖像写真と九州の文化遺産を記録した写真原板の長期保存について相談を受け、収集保存に伺った。片山さんが長年使ってい



坂本繁二郎 1946年



岩本真理 1948年



志賀直哉 1961年

た居室兼応接室で、原板を収めたロッカーに整理された原板や資料を拝見し、原板の良好な保存状況を確認した。さらに棚には中性紙のストレージボックスに収められたプリントを検分。なかでも人物撮影の基本となる肖像描写と、卓越した技術による金調色された全紙大の珠玉の肖像写真 106 点とガラス乾板とフィルムを収集することができた。

片山さんは 1914 (大正 3) 年シベリア・プラゴエシチエンスクで生まれる。21 (大正 10) 年、母から中国の詩人陶淵明の話を聞く。24 (大正 13) 年、旧明善中学の北村剛介先生から漢文の手ほどきを受け、陶淵明の「帰去来辞」を読む。29 (昭和 4) 年、シベリアで父が他界する。32 (昭和 7) 年、疋田晴久氏の元で写真技術を習得。35 (昭和 10) 年、21 歳で営業写真の道に入る。戦時中は営業写真の傍ら、「日本写真サロン」や「日本写真美術展」、「国際写真サロン」などに応募し入選を続ける。45 (昭和 20) 年、終戦後は専ら観世音寺の仏像や坂本繁二郎画伯をはじめとする画家や文士などを撮影。写真展に応募し入賞を果たすなど精力的に活動を続ける。

人物撮影は撮影する人物を観察するところから始まる。撮影者が人物(被写体)そのままを写すのではなく、自分のイメージをその人物を通して創造する眼を必要とする。そこには当然ながら写す人の好みや感動、感情が表出てくる。被写体の表情や仕草だけでなく、写される人物の生き立ちや豊富な人生経験から浮かび上がってくる風姿や細やかな動作も見逃さない鋭い眼力が

必要である。

次いで、撮る場所も大事である。イメージした雰囲気を壊さない、きめ細かな配慮と、採光が大事である。明るい背景は心温まる雰囲気を醸し出し、適度な暗さも必要、落ち着いた描写には欠かせない。何しろ写される人物の内的な心象をどう掴むか。表情豊かな瞬間をとらえるには、できれば傍で対話してくださる人がいると自然な表情が狙える。などなど人物表現の極意が滲み出ている。

とくに大型カメラで撮るときは、相手も緊張し硬い表情となることが多い。リラックスした表情は小型カメラで軽快な瞬間描写に心がける。自然さは何といっても自然光に勝るものはない。瞳にキャッチライトがあるかないかで、印象が大きく変わる。見つめる目の方向、目線、顔の向きで何を物語っているかが変化する。

片山さんの肖像写真には、人物撮影のいろはがすべて活用されていて、個性豊かな文化人の際立った表情に、氏の観察眼の鋭さを感じる。穏やかな印象でありながら、実に多彩な肖像の描写が氏の心象として表していた。

主な肖像人物を列挙すると、坂本繁二郎 (1946 年撮影)、巖本真理 (48 年)、山田耕筰 (57 年)、柳宗悦 (60 年)、志賀直哉 (61 年)、梅原龍三郎、奥村土牛、鎧木清方、小林秀雄、鈴木大拙、平櫛田中、三岸節子 (以上 62 年)、朝倉文夫、熊谷守一、東郷青児、片岡球子 (以上 63 年)、白洲正子 (77 年)、草野心平 (78 年)、井上靖 (84 年) などとキリがない。人物を撮るために私費でそれぞれの家を訪ねて撮影したという。

■日本写真保存センター 御徒町分室で整理作業を始める

2019 年 1 月 10 日、日本写真保存センターは、写真原板の収集保存を行っている作業事務所(分室)を、JR 山手線の御徒町駅から約 10 分の場所(台東区台東 3 丁目 16 番地 5 号の 11 階建てのミハマビル 5 階)に移しました。エレベーターを降り、ドアを開けると応接を兼ねたギャラリーがあり、センターが収集している作品による写真展(約 20 点)が開催されています。次の作業室では調査員による写真原板の整理作業が行われています。

保存センターが収蔵している原板は、明治末期から 1970 年代に撮影されたガラス乾板とフィルム類で約 30 万点にのぼります。作品の内容は大正ロマンが漂う家族写真から、昭和初期のモガモボ時代の若者たち。戦火の響き、軍事色に染まっていく日本。軍事訓練から空襲そして原爆の惨禍、敗戦と揺れ動いた激動の時代を捉えた作品など。ギャラリーではこの約百年間の日本人の姿、暮らしを捉えた種々の写真を、年 4 回順次入れ替え展示します。近現代の暮らしの諸相を反映する写真でアーカイブを構成しています。 (記・撮影/松本徳彦)



写真著作権の法的保護の歩み

大家重夫（久留米大学名誉教授）

2018年12月30日、著作権の保護期間が50年から70年に延長されましたが、日本の著作権に関する法律は明治9年の「写真条例」から始まりました。当時から「肖像権」という言葉はありませんでしたが、写真家と被写体との関係は常に大きな関心ごとだったようです。今回の著作権研究は法律家の大家重夫先生に日本の著作権法の変遷について振り返っていただくとともに、明治期における肖像にかかる権利の解釈について解説していただきました。大家先生は写真家が積極的に肖像権について発言しないと「街の写真から人が消えてしまう」と警告しています。

（著作権委員会）

● 1. 松崎晋二の功績 — 明治9年写真条例

写真が日本で普及し始めたのは、明治初期である。

明治政府は、明治7年5月、「台湾出兵」を行い、松崎晋二（1850～？）が、従軍写真師として同行、同じく従軍記者として同行した東京日日新聞記者の岸田吟香（1833～1905 岸田劉生の父）と親しくなった。

松崎は、マラリヤにかかりながら、台湾の岩山、山水風物、少女の写真、戦争の状況を撮影した。翌明治8年、内務省の小笠原諸島調査にも同行し、住民、動物、自然を撮影した。

写真は、契約した政府へ、それぞれ所定の枚数を納入し、写真師の松崎は、台湾、小笠原の写真を複製し、銀座界隈で販売した。暫くすると、同業者が、松崎の写真を無断複製し、販売し始めた。

松崎は、岸田吟香の助けを借りながら、政府へ、「著作権」保護の運動をし、写真の無断複製禁止の法律を実現する。政府には、台湾出兵、小笠原諸島調査で、知り合った役人が多い。明治2年出版条例に「図書肖像戯作等」とあり、肖像写真は保護されていると解する余地もあったが、政府は、松崎の要望をかなえ、立法した。

明治9年6月17日 太政官布告第90号の「写真条例」である。7条からなる。

「第1条 凡ソ人物山水其他ノ諸物象ヲ写シテ専売ヲ願ヒ出ル者ハ5年間専売ノ権ヲ与フヘシ之ヲ写真版権ト称ス但之ヲ願ハサル者ハ別段届出ルニ及ハス」

写真版権の保護期間は、「登録後5年」である。

第2条 版権ヲ得タル写真ニハ必ス每葉写主ノ標号及ヒ定価並ニ版権免許ノ年月ヲ記載スヘシ

第3条 版権ヲ得タル者ハ写真1版ニ付3葉ヲ納メ仍ホ免許料トシテ1版ニ付拾貳葉ノ定 価ヲ納ムヘシ之ヲ納メサル前ニ発売スルヲ許サス」以下省略。（以上、森田峰子「中橋和泉町松崎晋二写真場」朝日新聞社・2002年、に拠る）

日本は、明治9年（1876年）に、「写真条例」を作ったが、同じ、明治9年、ドイツが「不法の複製に対する写真の保護に関する法律」（1876年1月10日）と「美術的著作物の著作権に関する法律」（1986年1月9日）を公布した。日本は進んでいた。

● 2. 写真版権条例（明治20年12月28日、勅令 第79号）

明治18年12月、太政官制度から内閣制度に変わった。第一次伊藤博文内閣は、明治20年12月28日、新聞紙条例（勅令第75号）出版条例（勅令第76号）、版権条例（勅令第77号）、脚本樂譜条例（勅令第78号）、写真版権条例（勅令第79号）を公布した。いずれの条例も内務省が作成した。清浦奎吾局長（のち首相）、末松謙澄局長（のち内相）が関与した。この写真版権条例は、末松謙澄が立案したと推定する。末松謙澄は、福岡県行橋市出身、明治23年、第1回の総選挙に出馬し、当選し、議員提案者として版権条例を版権法に変えさせた（なお、末松は伊藤博文の娘婿である）。

写真版権条例は、写真を「凡ソ光線ト薬品トノ作用ニヨリ人物器物景色其他物象ノ真形ヲ写シタルモノヲ云ヒ」と定義し、写真版権を「写真ヲ発行シテ其ノ利益ヲ専有スルノ権」と定義した（第1条）。

写真版権の保護期間は、免許後5年から「登録ノ月ヨリ10年」となった（第6条）。

「第2条 写真版権ハ写真師ニ属シ写真師死亡後ニ在テハ其相続者ニ属スルモノトス
但シ他人ノ嘱託ニ係ルモノノ写真版権ハ嘱託者ニ属シ嘱託者死亡後ニ在テハ其相続者ニ属スルモノトス
嘱託ニ係ル写真ノ種板ニシテ現存スルモノハ版権所有者ニ於テ之ヲ写真師ヨリ受取ルコトヲ得ルモノトス」

写真で撮影することを写真師に依頼して、撮影した場合、本来、撮影した写真師が複製権をもつのが当然で

あるが、この場合、依頼した者が、複製権をもつという条文は、先に述べたドイツの明治9年の「不法の複製に対する写真の保護に関する法律」(1876年1月10日)と「美術的著作物の著作権に関する法律」(1986年1月9日)が規定していたもので、取り入れた。

末松謙澄は、国会議員として、議員提案し、版権条例にいくつかの条文を加除し、版権法に格上げさせた。このとき、第12条に2項として「版権登録ヲ得タル文書図画ニ挿入シタル写真ニシテ特ニ其ノ文書図画ノ為ニ写シタルモノハ其ノ文書図画ト共ニ版権ノ保護ヲ受ケルモノトス」を加えた。

● 3. 明治32年著作権法

日本は、懸案だった不平等条約改正に成功したが、著作権のベルヌ条約、特許権のパリ条約に加盟しなければならないことになった。交換条件である。

東大卒で、内務省へ入り、板垣退助内相、樺山資紀内相の秘書官を務めた水野鍊太郎が、欧州へ約8カ月出張し、著作権法を立案した。1、著作権は、著作により当然発生するという主義をとり、2、版権法、脚本楽譜条例、写真版権条例を廃止し、著作権法に統一し、3、著作物の範囲を拡張し、原則的保護期間を死後30年にした。

この著作権法(明治32年3月4日法律第39号)は、写真のみ保護期間は、10年、写真を発行した年の翌年から起算する、とし(23条1項)、写真版権条例の保護期間をほぼそのまま引き継いだ。水野鍊太郎は、「他人ノ嘱托ニ依リ著作シタル写真肖像ノ著作権ハ其ノ嘱托者ニ属ス」(25条)と規定し、(写真師に著作権があるとすれば、嘱托により撮影した人物の写真をその人の許諾を得ずに隨時これを複写し、発売、頒布でき、その結果、嘱托者の人権を害する)として、写真版権条例第2条を踏襲した。

水野は、「写真術により適法に美術上の著作物を複製した者は原著作物の著作権と同一の期間内、著作権法の保護を享有する」(23条3項)、版権法12条2項を引き継ぎ「文芸学術の著作物中に挿入した写真で、特にその著作物の為に著作し、又は著作せしめたるものであるときは、その著作権は文芸学術の著作物の著作者に属し其の著作権と同一の期間内継続す」(24条)などの規定を置いた。

● 4. 1970年(昭和45年)の著作権法改正

著作権法を改正することになった。

1962年(昭和37年)、著作権制度審議会が設置された。写真界から丹野章(1925-2015)が委員として入った。

「著作権法の一部を改正する法律」(昭和42年7月27日法律第87号)は、「第23条1項中10年トアルハ

当分ノ間12年トス」とし、公布の昭和42年7月27日から施行した。審議中に著作権が切れてしまう写真を救うためである。

1970年、著作権制度審議会が審議結果を答申し、著作権法の大改正が行われた。

写真は、著作物として保護され、著作物の例示に列举された。保護期間は公表後50年である。ただし、法律の施行月日に著作権が消滅している写真には、適用されない。

なお旧法の挿入写真に関する規定、嘱託による写真肖像の規定は設けなかった。無断撮影、無断撮影写真の無断公表については、民法不法行為として、肖像権侵害、プライバシー侵害として論ぜられることになった。これらに丹野章の存在が影響していると私は思う。

平成8年(1996年)、著作権法が改正され、写真の保護期間が「公表後50年」から、「死後50年」に変更された。これには日本写真家協会の存在が影響していると思う。

なお、この改正法の施行時に、著作権が消滅しているものは、消滅のままである。

● 5. 「撮る自由」はあるか

昭和30年代は、日本経済の高度成長時代であった。一方、労働者が、デモ行進を行い、警察官や会社側の者が労働者のリーダーの顔を写したり、逆に労働者側が、警察官の顔を撮影した刑事判例が多く出た(大家重夫「肖像権」新日本法規・1979年)。最高裁昭和44年12月24日判決(京都府学連事件)は、警察官が、相手方の意思に反しても写真撮影できる場合を1、現行犯的状況の存在、2、証拠保全の必要性及び緊急性、3、手段の相当性がある場合に限った。この判例は、日本での「肖像権を保護する法」の役割を果たした。

2011年、丹野章は、「社会的情景の一部、あるいは情景そのものとして存在する人の姿を撮影する行為は、「知る自由」の範囲に属するもので、「撮る自由」がある筈である」と『撮る自由』(本の泉社・2009年)で主張した。

写真家が、公開の場では自由に写真撮影をし、公表できるという「撮影権」を主張してはいかがだろうか。

大家重夫(おおいえ・しげお)



北九州市出身。京都大学法学院卒業後、文部省に入省し文化庁著作権課著作権調査官、著作権審議会専門委員等を歴任し1988年に退官。久留米大学名誉教授。特定非営利活動法人日本肖像権協会理事。主な著作:『肖像権』(1979年・新日本法規)、『改訂版ニッポン著作権物語』(1999年・青山社)など多数。

ケンコー・トキナー

ハイエンドカメラ対応カメラバッグ 「フォンタナ PRO ショルダー L」

ケンコーのカメラバッグブランド「aosta」から2018年10月19日に発売となった「フォンタナ PRO ショルダー L」は、ハイエンドカメラに対応。また、付属のリュックベルトを使えば、リュックとして使用することもできます。

また、1.48kgと超軽量を実現。気品のあるヘアライン柄のグレー外装とカメラバッグのイメージを一新するモデルです。

十分なサイズにより、200-500mmクラスの超望遠レンズ+一眼レフカメラ、テレコンの組み合わせでも収納可能。ノートPCも収納可能で必要な機材を全て収納可能です。価格はオープン（ケンコー・トキナーオンラインショップ価格で20,390円税込）

【製品に関するお問合せ先】

担当：広報・宣伝課 田原栄一
TEL：03-6840-2970
FAX：03-6840-2962
メール：etahara@kenko-tokina.co.jp
<http://www.kenko-tokina.co.jp/>

セコニック

感覚を視覚化する4種類の演色評価指標の表示が可能となったカラーメータ「スペクトロマスター C-800」を発売

スペクトロマスター C-800 は、世界で初めて搭載した演色評価指標である「SSI」をはじめ、「TLCL」、「TM-30-15」、「CRI」という4種の演色評価モードを装備しています。光の「色」のみではなく「質」を数値で把握し光源を管理することができます。「SSI」は映画芸術科学アカデミーが開発した演色評価指標で、CIE 標準光源との比較を指標とグラフで表示します。「TLCL」は英国 BBC 放送を始め欧州のプロードキャスト業界が採用している指標でカメラの特性を演算に入れ、テレビ映像の作成を前提とした演色評価指標です。「TLMF」と呼ばれる、基準の光源（メモリした値）との比較を指標で表示する機能も有しています。「TM-30-15」は99色の基準色と人間の目の特性を元に、

Rf（色忠実度）と Rg（鮮やかさ）を指標で表示。数値とカラーベクトルグラフィックで表示されます。「CRI」は、スタンダードな演色評価指標です。C-800 では CRI の比較モード（メモリ一値と現在の測定値比較）も搭載しました。写真のみでなく動画に関連したモードを多く搭載しています。価格は18万円



SIGMA 70-200mm F2.8 DG OS HSM | Sports
希望小売価格（税別）：190,000円
対応マウント：シグママウント、キヤノン EF
マウント、ニコン F マウント
発売中：シグマ用・キヤノン用
ニコン用：2月 22 日発売

【製品に関するお問い合わせ先】

担当：露出計営業部 国内営業グループ 吉澤隆史
TEL：03-3978-2366
FAX：03-3922-2144
メール：meter@sekonic.co.jp
<https://www.sekonic.co.jp>

シグマ

SIGMA 70-200mm F2.8 DG OS HSM | Sports のご紹介

プロの基本となるF2.8 通しズームレンズは、報道、スポーツ、風景、ポートレートなど70-200mm の焦点域で想定されるあらゆるシーンで、過酷な環境下でも最高のパフォーマンスを発揮する必要があります。光学性能、堅牢性、機動力の全てにおいてその要求に応えるべく開発された SIGMA 70-200mm F2.8 DG OS HSM | Sports。

軽量化と堅牢性を両立するためにマグネシウムを積極的に採用し、高い機動性を確保。防塵防滴構造を採用して、レンズ最前面には撥水防汚コートを施し過酷な撮影環境でも安心してご使用いただけます。全方向の流し撮りに対応する Intelligent OS を搭載し、約4段分の補正が可能です。色収差を徹底的に補正し、画面中心から周辺まで極めて高い解像度を実現しています。

軽量で強度の高いマグネシウム合金を採用した三脚座を採用。90°毎にクリックを付け、縦位置と横位置の撮影ポジションの変更を容易にしアルカスイスタイプの雲台、クランプに直接取り付けることも可能です。既に発売している 14-24mm F2.8 DG HSM | Art, 24-70mm F2.8 DG OS HSM | Art を併用すれば、F2.8 の大口径ズームレンズ 3 本で 14mm から 200mm までの撮影が可能に。コンパクトな装備であらゆるシーンへの対応が必要な場合、このレンズ 3 本が最大限のパフォーマンスを発揮します。

ライカカメラジャパン

控えめで高性能「ライカ Q-P」



フルサイズセンサーと明るい単焦点レンズを搭載した高性能なコンパクトデジタルカメラ「ライカ Q-P」が発売されました。トップカバーの上面にクラシックな「Leica」の筆記体のロゴをさりげなく刻印するだけにとどめ、「ライカ Q」よりも控えめさを追求したデザインが特徴です。

本体カラーには上質感あふれるマットなブラックペイントを採用し、洗練されたエレガントなデザインを引き立てています。さらに、シャッターレリーズボタンの形状は、独自のデザインを採用しています。上質なレザーを使用したブラウンカラーのキャリングストラップとスペアバッテリーが付属しています。仕様は「ライカ Q」と同様で、レンズはきわめて明るい「ライカズミルックス f1.7/28mm ASPH.」を搭載。定常光での撮影でも美しい描写を実現し、28mmという焦点距離により自然な遠近感で撮影できるので、さまざまなシチュエーションや用途で活躍します。高精細なEVF、便利なWi-Fiも内蔵しています。

ライカカメラジャパン株式会社
【製品に関するお問い合わせ先】
ライカサポートセンター
TEL : 0120-03-5508
メール : info@leica-camera.co.jp
<http://www.leica-camera.co.jp>

クレヴィス

田沼武能写真展「東京わが残像 1948-1964」2月9日(土)~4月14日(日)
世田谷美術館

浅草の写真館に生まれた田沼は、東京大空襲で生家を焼き出され逃げ惑う体験をしました。その時の鮮烈な記憶が自身の写真家としての原点になっているといいます。本展では、終戦直後の焼け野原から出発し、さまざまな矛盾を内包しながらも再生を目指し激しく変貌した東京の、オリンピックに至るまでの諸相をとらえた写真を「子ども」「下町」「街の変貌」の3つの視点から紹介します。また、特別企画として田沼撮影による世田谷ゆかりの文化人の肖像写真を併せて展示。総計200余点の写真作品で「戦後東京」の姿を振り返ります。

<関連イベント>

●3月16日(土) 田沼武能講演会

※ 14:00 ~ 15:30、
先着140名、申込不要、
参加無料。イベントに
関するお問い合わせは、世
田谷美術館 TEL : 03-
3415-6011(代表)まで。
観覧料:一般 1000円、
65歳以上 800円(ほか
開館時間:10:00 ~
18:00



《路地裏の縁台将棋》
[佃島]1958年

休館日:毎週月曜日※ただし2月11日(月・祝)
は開館、翌2月12日(火)は休館。

【お問い合わせ先】

担当:木村
TEL : 03-6427-2806
メール : info@crevis.jp
<http://www.crevi.jp>

タムロン

タムロン 28-75mm F/2.8 Di III RXD
(Model A036) が主要3賞を受賞

28-75mm F/2.8 (Model A036) はソニーEマウント対応のフルサイズミラーレスカメラ用に新設計された大口径標準ズームレンズ。小型

軽量化を突き詰め、質量550g・長さ117.8mmを実現しました。芯のあるやわらかい描写と美しいボケ味、そして合焦部の優れた解像感を両立。高い描写性能で細部を描きつつ、大口径ならではの柔らかさを表現します。

このModel A036は各方面で高く評価され、欧州で権威のある写真・映像製品の賞であるEISAアワード「MIRRORLESS STANDARD ZOOM LENS 2018-2019」の受賞を始め、写真家、評論家、流通関係者により消費者目線で評価される「デジタルカメラグランプリ2019」の交換レンズ部門における最高峰の賞「総合金賞<交換レンズ/ミラーレス>」を受賞。そして海外の大手レビューサイトDPRReviewにて「Zoom Lens of The Year 2018」を受賞いたしました。



【製品に関するお問い合わせ先】

タムロンレンズお客様相談窓口ナビダイヤル
TEL : 0570-03-7070 または 048-684-9889
FAX : 048-689-0538

オリンパス

ミラーレス一眼カメラ OM-D E-M1X

オリンパスは2019年2月、高い評価をいただいておりますE-M1 Mark IIと並ぶプロフェッショナルモデルとして、新たに「OLYMPUS OM-D E-M1X」を発売いたします。この機種の主な特長は以下の通りです。

- 縦/横位置で同じ操作性を実現したバッテリーグリップ一体型形状
- 世界最高※7.5段の手ぶれ補正(※1 2019年1月24日現在発売済みのレンズ交換式カメラにおいて)
- 従来より更に厳しい試験をクリアした防塵・防滴機能
- 三脚不要「手持ちハイレゾ(50MP出力)」機能
- USB給電/充電可能
- UHS-II対応ダブルスロット
- 屋内撮影時に発生するフリッカーリー対策機能
- ファインダーを覗いたまま素早くAF位置を移動できるマルチセレクター、カスタマイズ可能なAFターゲット、そしてフォーミュラーカーや飛行機、鉄道の形状を認識し被写体を追い続けるインテリジェント被写体認識AFなど、大きく進化したAF機能
- カメラ本体でスローシャッター効果を狙った表現が可能となる「ライブND」機能

本機種の発売によってオリンパスは「より小

型軽量」を求める方にはE-M1 Mark IIを、「より高いホールディング性や操作性」を求める方にはOM-D E-M1Xをご提供、目的に応じたカメラ選びをご提案します。レンズを含めたシステムとしての小型・軽量化を担保しつつ、新しい価値をご提供するオリンパスの自信作です。



【製品に関するお問い合わせ先】

オリンパスカスタマーサポートセンター
TEL : 0570-03-073-000 (ナビダイヤル)
<https://olympus-imaging.jp/>

東京工芸大学

田沼武能写真展「童心 - 世界の子ども」
2019年3月5日(火)~4月27日(土)

世界各国を取材してきた田沼は、子どもたちの姿に魅せられ、長年にわたって世界中で子どもたちを撮り続けてきました。これまでに120カ国を越える国々を訪れ、また、ユニセフ(国連児童基金)の親善大使である黒柳徹子とも行動と共にしながら、子どもたちの写真を通してメッセージを送り続けています。

田沼は「子どもは地球の鏡」と述べています。内戦や貧困など困難な状況に暮らす子どもたちを含め、世界各地の子どもたちの生き生きとした姿や遊びを捉えることにより、田沼の写真は、子どもたちの素晴らしさ大切さを訴えると共に、地球上の諸状況をも伝えています。

90歳を迎える現在も写真家として精力的に活動を続ける田沼武能。そのライフワークである世界の子どもたちを、本学のコレクションと新たに加えた作品で構成ご紹介します。

(10:00 ~ 20:00 開館 会期中無休・入場無料)

【お問い合わせ先】

担当:写大ギャラリー
吉野・深尾
TEL : 03-3372-1321
FAX : 03-5388-7996
<http://www.shadai-t-kougei.ac.jp>



「大切なハンカチ」
1978年

(構成／出版広報委員:川上卓也)

竹内敏信さん、企画写真展・寄贈感謝状授与式

2018年12月5日(水)～23日(日) 岡崎市美術館

JPS名誉会員の竹内敏信さんが、写真作品1760点を出身地の愛知県の岡崎市美術館に寄贈した。同美術館はこれを記念し、平成30年度岡崎市美術館企画写真展「竹内敏信写真展～日本の原風景を求めて～」【12月5日(水)～23日(日)】を開催し、また岡崎市長内田康宏氏より竹内さんに寄贈感謝状が贈られた。

愛知県岡崎市出身の竹内敏信さんは、1980年代より日本の豊かな四季の変化の中に、繊細な美しさと深遠な日本人の精神性を見出し、斬新な作風で風景写真の地平を切り開いてきた写真家として評価されている。

感謝状授与式(12月12日:11時30分)の会場となった同美術館2階ロビーには、開会30分前には既に100名近い地元の写真関係者や友人知人、新聞記者たちが集まり、竹内さんの到着を待っていた。間もなく到着された竹内さんは、瞬く間に挨拶をしようとする人々に取り囲まれた。かつて竹内さんと仕事で制作した冊子を持ち出し、当時のエピソードを懐かしそうに話す年配の男性の姿もあった。

定刻より少し遅れて始まった授与式では最初に竹内さんの紹介があり、続いて岡崎市長内田康宏氏が「日本を代表する風景写真家竹内敏信氏の写真を、岡崎市美術館で収蔵し市民の皆様に見ていただくことは、郷土の写真芸術・文化の向上と市政に大きく寄与するものと確信しております」と挨拶され、内田市長から竹内さんに感謝状が贈られた。記念撮影の後、授与式は温かく和やかな雰囲気のうちに終了した。

授与式の後、企画写真展会場に移動した参列者は、写真集『天地』掲載の写真を中心に展示された、約100点のオリジナルプリントを熱心に鑑賞しながら、写真談義に花を咲かせていた。

寄贈された写真作品の今後の活用などについて、副館長代行(学芸員)の稲垣満春氏は、「岡崎市美術館は今まで郷土ゆかりの画家や作家を中心に作品の収集を行い、企画展を開いてきました。竹内さんは写真家として初めての収蔵になりますが、1760点の素晴らしい写真作品の寄贈を受け大変嬉しく思っています。今後は写真の整理を進めながら、常設展示

を行い市民の皆様に楽しんでいただき、同時に、写真文化の向上に役立てていきたいと計画しています」と話された。

竹内敏信さんからは次のような、喜びのコメントを頂いた。

「今まで長い年月をかけ数多くの写真展を様々な地域で開催してきた。そのため私の作品はバラバラになってしまい、一ヵ所に集めたいと以前から考えていた。今回岡崎市美術館に寄贈することで私の作品(展示用)を全て集めることができた。それも生まれ故郷であるこの場所に。私の家族も古くからの友人も喜んでいた。私自身も嬉しく、これからが楽しみである」

竹内さんの寄贈がさきがけとなり、各地の美術館で郷土出身の写真家の作品収蔵が増えることを願いながら、岡崎市美術館を後にした。

(記・撮影／出版広報委員：飯塚明夫)



岡崎市長 内田康宏氏と共に

竹内敏信(たけうち・としのぶ)

1943年愛知県額田郡宮崎村(現在は岡崎市)生まれ。名城大学理工学部を卒業後、愛知県庁勤務を経てフリーの写真家となり、35mmカメラの機動性を生かした自然風景写真で高い評価と人気を得る。アマチュアの指導にも熱心で、全国各地で多くの写真セミナーの講師や写真コンテスト等の審査員を務めるほか、写真展や講演会を開催している。2004年写真集『天地』で日本写真協会賞年度賞、2008年第6回飯田市藤本四八写真文化賞を受賞。日本写真家協会名誉会員。



寄贈作品の前で友人と旧交を温める



大勢の参列者に囲まれて



ゆったりとしたスペースの企画写真展会場

奥村泰宏・常盤とよ子写真展 「戦後横浜に生きる」

2018年10月6日(土)～12月24日(月)、横浜都市発展記念館

2018年10月6日から12月24日まで、横浜市中区の横浜都市発展記念館で、「戦後横浜に生きる」と題された写真展が開催された。

写真撮影は奥村泰宏氏と常盤とよ子氏。共に横浜に生まれた2人が出会ったのは1951年頃のこととされ、写真活動を続けていた奥村氏との出会いを機に、それまではフリー・アナウンサーとして活躍しながらも、あくまでも写真は趣味であった常盤氏も職業写真家の道を志すようになった。もちろん、両名の作風は異なったものであるが、共に横浜を舞台として活躍し、終戦直後から昭和中期にかけての、今日とは大きく異なる横浜の姿が記録されていることを受けて、表題の写真展の開催となった。

会場となった横浜都市発展記念館は、横浜市中区の日本大通りに面して建つ博物館で、主に横浜市の歴史と文化をテーマにした展示を行っている。いわば、横浜のもっとも横浜らしい場所に建つ博物館であり、奥村・常盤両氏の作品は、横浜の歴史を今日に伝える貴重な記録として、同博物館の展示テーマとしてうってつけのものであったに違いない。

日本写真家協会の名誉会員でもある常盤氏のさまざまな作品の中で、もっとも高い評価を得たものの一つが、働く女性の姿を写した作品群である。今日と異なり、終戦直後から昭和中期にかけての女性の職場とは非常に限られたものだったとされる。その状況下において、常盤氏が積極的にレンズを向いたのは、いわゆる赤線地帯で働く女性などで、同性の立場によって撮られた女性が働く場所の情景は、見る者にある種

の激しさを訴えかけてくる。常盤氏の代表作とされる『お六さんの部屋』は、チャブ屋と呼ばれる外国船の船員向けの妓楼で働いた経験を持つお六さん自身が建てた狭い部屋の中で、服や荷物が溢れる中に佇むお六さんの姿が捉えられている。この作品も会場に展示され、目を引く存在となっていた。会期中に「展示解説」が6回行われ、非常に多くの参加者があったことも、常盤氏の作品の社会性の高さを物語る事象となった。

取材の当日は時々雨が降る悪天候の一日であったが、会場には多くの人が来場し、同館で調査研究員を務める西村健さんの作品解説に耳を傾けるべく、何重もの人の輪ができる盛況となった。来場者は、カジュアルな服装の地元に在住するいわゆるシニア層が中心であったが、モノクロによるドキュメンタリータッチの強い作品が並ぶアカデミックな写真展に、それだけの関心が寄せられていることに驚かされた。

デジタル写真の普及を機として、今、写真の世界は急速な変貌のさ中にある。表現手段は多岐に亘り、銀塩写真の時代には到底不可能であった状況下でも、容易に撮影を行うことが可能になった。

それでも、写真のもっとも本来的な特質、すなわち一瞬を記録し、それを未来永劫に向けて保存し、世代を超えて見る者への問い合わせを行うという一点は、今も何も変わっていないのだろう。見る者にとっても、写真に期待するのはその部分である…。そんなことを改めて認識してくれる写真展であった。

(記・撮影／出版広報委員：池口英司)



西村調査研究員の解説に耳を傾ける来場者



終戦直後の横浜の風景に見入る来場者



展示解説では幾重ものの人の輪ができた



当時の世相を記録した資料も展示された



両氏が使用した機材などを展示



ビデオ出演の形で当時を回顧する常盤氏

第12回JPSフォトフォーラム

(2018年11月10日(土)：有楽町朝日ホール)

主催：公益社団法人 日本写真家協会、朝日新聞出版「アサヒカメラ」 後援：文化庁

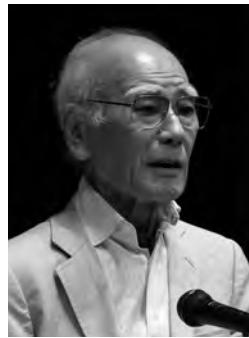
今回のテーマ：

「テーマ、眼差し、写真の力」

三人の女性写真家の物語

開会挨拶：会長 熊切圭介

フォトフォーラムは今年で12回目を迎えますが、フォトフォーラムは写真というメディアのあらゆる面を通じて、写真の面白さ、楽しさ、あるいは魅力を皆さんに知ってもらい、共感していただくところにあるのではないか、というふうに思っています。今日の3人の方はいずれも、写真家として深い経験と深い知識をお持ちの方です。写真にとって、「日常性」は大事なテーマです。そういった日常性をどう生かすか、そのへんのことに関しても、今日の3人の方のお話は参考になると思います。



安田菜津紀 *Natsuki Yasuda*

「写真を撮る仕事とは、自ら現地に出向き、人に会いに行くことでもある」

岩手県の陸前高田は夫の父母が暮らしていた地。東日本大震災直後、現地で写真を撮ることに葛藤を抱えていた私が唯一シャッターを切れたのが、高田松原に1本だけ残った1本松でした。波に耐え抜いた松が希望の象徴のように見えたのです。ところがこの写真を見た義父は、「7万本あった頃の松原と共に暮らしてきた自分たちにとって、この松は津波の力を象徴する以外の何物でもない。見るとつらくなる」。自分は誰の立場に寄り添いたくて、シャッターを切っていたのかとハッとしたせされました。義父からの教訓は今も私の大切な軸になっています。

海外では今、シリアを取材しています。学生時代に通っていた頃は、治安がいい国でした。当時の人口は約2200万人。ところが2011年3月頃内戦が始まり、現在国内外で避難生活を送る人々は1200万人を超えています。今年の春、8年ぶりにシリアを訪れましたが、戦闘に見舞われて廃墟となっている町が目立ちました。

国境を越えたヨルダン側で出会ったアブドラ君という男の子は、爆撃にあい、頭にはいくつもの手術跡がある。彼の写真を撮り、次に訪れた時にお母さんに渡したら、喜んでもらえました。小さい頃の写真も全部爆撃で焼けてしまった。今度はアブドラが元気になり、外を走り回っている写真を撮りに来てください、と。しかし残念ながらアブドラ君は、亡くなってしまいました。

なぜわざわざ日本から取材に行くのかという問い合わせの答え。日本と現地でどんな情報と感覚の開きがあるのか、それを肌触りのある形で持ち帰ってきて初めて、遠い地が少し近くなるのではないかと思っています。



【やすだ・なつき】1987年生まれ。16歳の時「国境なき子どもたち」のレポーターとしてカンボジアを取材。現在東南アジア、中東、アフリカで取材を続ける。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に記録し続けている。「HIVと共に生まれる—ウガンダのエイズ孤児たち」で第8回名取洋之助賞受賞。著書に写真絵本『それでも、海へ 陸前高田に生きる』など。現在TBSテレビ「サンデーモーニング」にコメンテーターとして出演中。

毎年恒例となったフォトフォーラムが2018年11月10日(土)、有楽町朝日ホール(東京都千代田区)で開催されました。今回は大石芳野氏、田中弘子氏、安田葉津紀氏を招き、「テーマ、眼差し、写真の力」というテーマで行われました。

常連の方々も多くみられるなか、今回は333名の参加者で席が埋まり、各氏の講演と『アサヒカメラ』編集長の佐々木広人氏の司会でのパネルディスカッションが繰り広げられ、写真談議に漫るひと時を楽しみました。午後の部の初めにはステージ投影でのパネリスト4名による作品講評会が行われました。

田中弘子 Hiroko Tanaka

「写真を撮ることで、心のつながりも生まれる。だから写真は面白い」

絹織の都・桐生市は、私が小学校の頃、父が単身赴任していた町です。ある時、故郷をテーマにグループ展を行うことになり、まずは上毛電鉄に乗って一駅一駅降りて写真を撮ることから始めました。

ある日、自転車で走っていたら工場の中からカシャッカシャッという機織りの音が聞こえてきたので、勇気を奮って訪ねてみた。それが米澤整経さんとの出会いです。そこから絹にまつわる撮影を始めましたが、養蚕を撮りに行くのは成長のひとつひとつを記録に残すことなので、時間も年月もかかります。分からることは群馬県庁の蚕糸園芸課でも情報をいただきましたし、米澤さんからいろいろな同業者を紹介していただきました。

養蚕は本当に重労働です。桐生市で写真展を開いた時のこと。一枚の写真を前に、じっと見入っている青年がいました。声をかけると、「これは私の両親です。こんな大変な仕事を続けながら、大学にまで行かせてくれました」と

涙を流していた。そんな言葉をいただけるのは初めてでしたし、やっぱり写真っていいなと実感しました。7年かけて撮影した「繭の輝き」で林忠彦賞を受賞した時は、米澤さんのご長男がとても喜んでくださった。写真を撮ることで心のつながりも生まれるのだと、嬉しく思いました。



群馬県の養蚕業は今、存続の危機を迎えています。最近、遺伝子組み換えで緑色に光る繭が誕生しました。(青色LEDの光を繭にあてて、黄色のフィルターで見ると繭が緑色に光って見える。)新しい技術で養蚕業もこれからどういう時代を迎えるのか、見守っていきたいです。

【たなか・ひろこ】1942年生まれ。92年から4年間、関東テニス協会ジュニアニュース誌広報写真を担当。98年から群馬県桐生市の絹織物の取材を始め、養蚕業へと広げて、2005年「繭の輝き」としてまとめ、写真展を行い雑誌にも発表。同作品で2006年第15回林忠彦賞受賞。現在は東京の川、開発以前からの西新宿、多摩ニュータウンなどをテーマに都市の姿を追いつけています。日本写真协会会员。

大石芳野 Yoshino Oishi

「『戦争は一度始めたら終わらない』と呼びたい。それが私の写真家人生の柱」

私は半世紀近く写真を撮っております。最初にカンボジアに行ったのは1966年で、当時は東南アジアのオアシスという感じでした。次に行けたのが1980年。その直前にポルポト時代があり、150万とも200万人とも推定される人々が虐殺され、至るところに遺骨があった。それを撮影して日本に帰ったら、写真評論家からも先輩方からも、大石の写真はねつ造だと言われました。当時日本では、虐殺はなかったとされていたのです。

その後ベトナムに行きました。地球一強いと私が思っていたアメリカと戦い、ベトナムから追い出したのはどんな人たちなのか知りたかったのです。その取材の中で、アメリカ軍が散布した化学兵器の枯葉剤の影響で障害を持った子どもが産まれていることを知り、取材を始めたものの、また日本でねつ造だと言われたのです。カンボジアとベトナムの枯葉剤の被害を撮っていた約15年間は、私の写真家人生の中で一番つらい時期でした。

戦禍が続くアフガニスタンでも取材を継続していますし、90年からはチャルノブイリの取材も継続的に行っています。日本では広島と長崎、沖縄を撮り続けています。もともと私は、人間の暮らしの違いを写真に撮って記録したいと考えていました。でも戦争というのは、そういう人々の日常を壊してしまうのだということを強く感じ、戦禍の人びとを撮るようになりました。日本も70何年も前に敗戦を迎えたのに、人々の心の中、体の傷から戦争が抜けない。これが戦争の怖さだと、痛感しています。「戦争は一度始めたら終わらない」と呼びたい。それが、私の写真家人生の柱となっています。



【おおいし・よしの】戦禍や内乱など困難な状況にありながらも誇りを持って生きている人々、そして文化や風土を大切にしながら生きている人々が主なテーマ。著作に『沖縄に生きる』『沖縄 若夏の記憶』『HIROSIMA 半世紀の肖像』『カンボジア苦界転生』『ベトナム凜と』『夜と霧は今』『子ども戦世のなか』『祈りを折るラオス』『隠岐の国』『福島 FUKUSHIMA 土と生きる』『戦争は終わっても終わらない』など。

パネルディスカッション

パネリスト

大石 芳野
田中 弘子
安田 菜津紀

司会：佐々木 広人（『アサヒカメラ』編集長）

佐々木 今回のお題は「テーマ、眼差し、写真の力」。最初、事務局にこのテーマでパネルディスカッションをしてくださいと言われた時、難しすぎたと思いました。ですがお三方の講演を聞き、私なりにこのテーマを噛み砕いてみよう、と。「テーマ」は「何を伝えたいか」。「眼差し」は「被写体とどう向き合って、どう捉えていくか」。「写真の力」というのは、「写真をどのように伝えるのか」と同時に「写真はどう受け止められるのか」。

安田さんの話で、義理のお父さんが陸前高田の1本松の写真を見た時、撮った側とは受け止め方が違った。それが自分の中で教訓として生きている、と。1枚の写真がどのように受け止められるかというのは、まさしく「写真の力」だと思います。まず、それぞれ自分ではないお三方の作風をどのように受け止められたか。

大石 田中さんはフィルムで撮っておられるそうですが、フィルムでよくあそこまで微妙な色を出しているなと思いましたし、同時にフィルムのよさがよく出ている。日本で受け継がれた繭や絹の深みが写真から現れているなと感じました。安田さんは現代的な今の人だと感じました。それはデジタルで撮っているからかもしれません。若いみそらで、よくシリアという危険な場所にも行かれましたね。今はそういうことを避けて通りたい人が増えている中で、「なぜ日本人の自分がそこに行って撮り、伝えるか」という意味がよくわかりました。

田中 私はお三方の写真を通して、自分の身にあのようなことが起きたら本当に嫌だ、と感じました。私は戦地に撮影に出かけて行く勇気はありません。ただ外国で起こっていることだというだけではなく、写真を通して、心と体で受け止められた。それをまた言葉で語ることができるのだと、今日は少し学んだ気がします。

佐々木 たとえば戦争や内戦が起きた時、テレビや新



司会の『アサヒカメラ』佐々木
広人編集長



聞の報道で犠牲者の数とか、戦況がどれだけ悪化しているかといった文字情報、映像情報を得ることができます。でもそれはちょっと昔風の言い方をすると、銃の前の話。お2人の写真は銃後の様子というか、大きなメディアでは絶対に伝わらないところにしっかり目を向けています。何が起きましたというファクト優先の写真と違い、その場にいる人たちや悲惨な目にあっている人たちに寄り添い、自分という主軸がちゃんとあって撮っていると思います。だからこそ、たとえば爆撃そのものの写真ではないのに、余計身につまされて、自分のことのように感じられる。

安田 大石さんの写真は、ニュースとはいって意味で対極にある写真だと思います。たとえば今日爆撃があったとか新しく起きたことはニュースに乗りやすいけれど、その後まだ避難生活を送っている人がいる、まだ薬の影響で苦しんでいるなど常態化してしまったものには、なかなか光が当たらない。とくに印象的だったのが、 Chernobyl の事故直前に生まれた女性。その女性が30歳になるまで、写真で追いかけていらっしゃる。

田中さんは今日お話をしながら何度も声を詰まらせていた場面があり、私もつられて涙が出そうになりました。田中さんの、被写体の方々への愛情や思いの厚みが、写真にも表われている。私も陸前高田で小学校の入学式の写真を撮らせていただいて感じたのですが、写ってくださった方やそのご家族が喜んでくださるのは、写真家としても喜びです。田中さんのお写真を拝見し、改めて写真の喜びや意味の原点に返らせていただきました。

佐々木 田中さんの写真は、相当対象に入り込んでいますよね。僕は、繭がたくさんある写真に強烈な印象を覚えました。今まで国内で培われてきた歴史の重みを感じさせるがごとく、とてつもない座操りを始めて30数年「他の人に代わることの出来ない誇りの持てる仕事」ときっぱりと言ふ。木箱に座り続けて行う根気のいる仕事。迫力で撮って



撮影：田中弘子

いる。

田中 このテーマにかかることが多い7、8年です。蚕から繭になるのに時間がかかりますし、絹をとりまく状況も変化している。すると、「ここでおしまいだからここで発表する」と、なかなかできなくて。

佐々木 お三方とも、伝えたいことがたくさんある。これは「テーマ」に相当する話です。撮影を経て、見てきたこと、感じたことがたくさんあるからこそ、言葉も湧き出てくる。それくらい伝えたいことがあるからこそ、1枚に落とし込んだ時に念が深いというか、しっかりした写真になるのかなと感じます。

大石さんはアフガン帰還兵の写真が印象に残りました。戦争から帰ってきた人が、疲れや悲哀などいろいろなものを背負っていることが現れている。この方は撮らせてくださいとお願いし、簡単にOKしてくれたんですか?

大石 かなり時間をとり、お話をたくさん聞かせていただいてから撮影しました。その人が抱えてきたものを1枚の写真で表現するためには、この人の何を表現したらいいのか、自分なりに探さなくてはいけないので。この方の場合も、旧ソ連の人たちはみんなアフガン侵攻を支持した。ところが徴兵されて現地に行き、彼は「この戦争

は間違っていた」と感じた。仲間が亡くなったり、自分たちの弾でアフガン人が死んでいく。そのような話を聞いた後の写真です。相手の気持ちと自分の気持ちがピタッと合った時に、シャッターを押す、という感じです。

佐々木 まさに共同作業ですね。

大石 そうですね。でも、うまくいかない時もあります。そんな時は「この下手くそめ!」と、自分で自分を怒ります。

佐々木 今のお話を、海外だからとか戦地だから、といった捉え方はしてほしくない。状況がどうあれ、人を撮るという行為に変わりはないわけですから。人とどう向き合い、どうコミュニケーションを取って距離を詰めていくかというのは、カメラを持って「撮る撮られる」の関係になったら、場所はどこでも変わらないと思います。

安田 私も、落ち着いて人と向き合い、コミュニケーションの延長線上に自然とカメラがあつて入ってくるまで待つ、という作業が必要だ、と考えています。大手メディアの場合、たとえば今日の夕刊までに間に合わせなくてはいけない、という場合もあるでしょう。でも我々フリーランスの人間は、ある意味締切りがないので、自分を相手のペース

に合わせることができます。

佐々木 田中さんも、撮っている時間より明らかに待っている時間、コミュニケーションを取っている時間のほうが長いですね。

田中 私が写真を撮る上で自分に課しているのは、ありのままを撮る。注文は出さない。静かに、自分は消えているようにして写真を撮る。「こうしてください」とは言わないようにしています。

佐々木 安田さんの、シリアの子どもたちの写真は明るいですね。

安田 内戦前の写真です。ある時、小学校で内戦前のシリアの写真を見せたら、1年生の女の子が「こんなにきれいなところを、なぜ人間は壊しちゃうの?」と聞いてくれた。私たちと同じ日常があって、そこで地続きだからこそ痛みがあるんだと、その子は瞬時に察してくれた。悲惨な写真を直接的に見せるだけが内戦を伝えることではないんだと、改めて教えてもらいました。

佐々木 平和だった時を撮っておいてよかったです。これこそまさに、撮っておくことの重要性です。僕は仙台に友達が多くて、宮城県にちょくちょく行きますが、津波が来る前の海岸の姿を忘れている。人は、当座に起きていることしか意識しないことが多い。記憶を呼び戻せるのは、やはり写真の強さだと思います。

下半身がつながった結合双生児のベトちゃんドクちゃんの存在も、大石さんが写真で見せてくれることで、記憶の底にしまわっていたものがダーッと表に出てくる。ところで大石さんみたいに継続してあちこち行っていると、日本にはあまりいられないのでは?

大石 3・11以降は福島県が圧倒的に多く、月に1回くらいは通っています。また、最近は日本が大変という気持ちが強いので、以前ほど海外には出ていません。

佐々木 安田さんはなぜ写真を撮るようになった?

安田 高校の時「国境なき子どもたち」というNPOの活動でカンボジアに行かせてもらい、帰ってきて教室で写真を見せたら、「それどこ?」と、普段話したことがないような同級生が話しかけてくれた。写真というのは「これ、なんだろ?」というふうに、何か知りたいという最初の扉を開いてくれるんだなと気づいたんです。

佐々木 映像はある程度の時間見なくてはいけないし、文章は読まなくてはいけない。見た瞬間に「これ、何?」と言わせられるのは、写真くらいかもしれません。時代が変わっても、そこは変わらないと思います。



ベトナム ナースが抱く男の子は、ベトナム戦争中にアメリカ軍が大量散布した枯葉剤ダイオキシンによって先天性障がいを受けた。

撮影: 大石芳野



陸前高田市、川原祭組の獅子舞を導く子どもたち。震災後ばらばらに暮らしていても、祭りの度に再び集うことができる。

撮影: 安田菜津紀

盛況！パネリストによる作品講評会

フォトフォーラム協賛：エプソン販売(株)、オリバス(株)、キヤノンマーケティングジャパン(株)、(株)シグマ、(株)タムロン、(株)ニコンイメージングジャパン、富士フィルムイメージングシステムズ(株)

(計7社 五十音順)



午後の部の初めは、パネリスト大石芳野氏、田中弘子氏、安田菜津紀氏、佐々木広人氏の各氏による作品講評が行われました。事前に申し込んだなかから選ばれた4名の写真、合計17作品がステージで順次投影され、最前列に控えた講評応募者のマイクによる写真説明を交えながら、佐々木氏により進められました。パネリストと講評応募者は対話をしながら1枚1枚丁寧に講評いただき、限られた時間内ではありましたが講評応募者、聴講参加者とも充実した講評会となったようです。

各休憩時間には協賛会社の動画によるスクリーン広告が上映されました。最後に松本徳彦副会長による挨拶、JPSについて、写真保存センターとその開催写真展についての案内があり、盛況のフォトフォーラムは閉会いたしました。

(記／篠藤ゆり[講演、パネルディスカッション]、出版広報委員：小野吉彦
[イベント]、撮影／出版広報委員：川上卓也)



閉会挨拶を述べる松本徳彦副会長



講評を行うパネリスト4氏



客席最前列に控えた講評応募者4名

第44回「日本写真家協会賞」贈呈式

受賞者：「ソニーイメージングプロダクツ＆ソリューションズ株式会社」

第14回「名取洋之助写真賞」授賞式

受賞者：鈴木 雄介「The Costs of War」

やどかりみさお（奨励賞）「夜明け前」

第2回「笹本恒子写真賞」授賞式

受賞者：足立 君江

平成30年12月12日（水）於：アルカディア市ヶ谷

第44回「日本写真家協会賞」贈呈式および第14回「名取洋之助写真賞」授賞式、第2回「笹本恒子賞」授賞式を2018年12月12日、東京都千代田区のアルカディア市ヶ谷にて受賞者、来賓、当協会の賛助会員、および会員参加のもとで盛大に開催した。

日本写真家協会賞は「写真技術に関する発見、発明、開発において顕著な功績が認められる個人または団体に対し贈られる」賞で、今回はソニーイメージングプロダクツ＆ソリューションズ株式会社に、名取洋之助写真賞は「新進写真家の発掘と活動を奨励する」ために35歳までの写真家を対象とした賞で、今回は鈴木雄介さんと、奨励賞としてやどかりみさおさんに、笹本恒子賞は「時代を捉える先鋭な眼と社会に向けてのヒューマニズムな眼差しに支えられた写真群を顕彰するため」に設けられた賞で、今回は足立君江さんに贈られている。

式の最初は熊切圭介会長の挨拶があり、続いて来賓の文化庁参事官の坪田知広様からの挨拶があった。坪田様からは「写真は様々なものを記録して後世に継承する重要な文化芸術です。写真芸術を先導する皆様方には、写真を通じたわが国の文化芸術の発展と、振興のために一層のお力添えを賜りますようお願い申しあげます」との祝辞を述べられた。

「日本写真家協会賞」贈呈式

協会賞贈呈式では熊切会長より、表彰状と記念の楯が、受賞者ソニーイメージングプロダクツ＆ソリューションズ株式会社デジタルイメージング本部 第1ビジネスユニットシニアゼネラルマネージャー田中健二様に贈られた。田中様からは「2006年にレンズ交換式一眼レフを発売以来、自社でイメージセンサーの開発、レンズ



文化庁参事官坪田知広様の来賓挨拶



熊切会長より受賞者へ表彰状と記念の盾が贈られた

開発などを手掛け、皆様の活躍の場に役立てるよう心掛けました。ハードウエア以外にも、皆様の活動を少しでもサポートするプロサポートサービス、発表の場として銀座のイメージングギャラリーなどにも力を注いでいます。今後もハード、ソフトの両輪で頑張っていきます」と受賞の言葉があった。

受賞理由は、「ソニーは数々のイメージセンサーの開発を通じて高画質、高感度、高速処理などのデジタルカメラの進化を促し、写真表現の革新に貢献してきた。さらにフルサイズミラーレスカメラの開発を進め、高性能レンズや画像処理システムと合わせた卓越した技術力を駆使して、写真家の創作活動に新たな領域を開拓してきたこと」に対して。

「名取洋之助写真賞」授賞式

続いて第14回名取洋之助写真賞の授賞式が行われた。受賞者の鈴木雄介さん（34歳）と、同奨励賞のやどかりみさおさん（35歳）に表彰状と記念の楯が贈られた。

名取洋之助写真賞を受賞した作品は、「本当に戦争を無くしたい」現代の戦争とはどんなものか、戦争が何を生み出し、私たち人間や世界にどう影響しているか。ビジュアル化して伝えた作品。

奨励賞は、妹の双極性障害の記録。躁と鬱、同じところを繰り返しているかのように見える病。少しづつ変化する心は、まだ暗闇の中だが、「夜明け前」であるだけ。写真を撮ることで前進していることを可視化しようと、自身の夜明けをも見つめた作品。

選考委員による選考経過の講評で、鈴木さんの作品について、「フォトジャーナリズムとして、しっかりと見据えて撮影された作品で、被写体から多くが語られてく



受賞者の田中健二様による受賞者挨拶



「日本写真家協会賞」贈呈 記念写真



「日本写真家協会賞」贈呈式 会場風景



「名取賞」受賞者の鈴木雄介さんによる受賞スピーチ



奨励賞受賞者・やどかりまさおさん代理の菊池創造さん



「笹本恒子写真賞」授賞 記念写真

る」と称賛した。また、やどかりさんの作品について、「壊れそうな心を写真で伝え、取り巻く社会へのメッセージが表現されている」と評した。

受賞者の鈴木さんからは「戦争とは何か、戦争が人間社会に与える影響とは何かを、写真で組み上げました。現代の世界情勢や、ハイテク産業が軍事に関わるなど戦争が続き、なくならないが、言語を超えて人間を振り動かすことができるは写真だけだと思っています。写真が自分たちの道を見つめ直すきっかけになれば良いと思っています」という言葉が。療養中のやどかりさんの代理として出席した菊池創造さんからは「この作品は、精神疾患をテーマとしたものです。作品が、近過ぎて見えないもの、見ようとしないものに目を向けるきっかけになれば幸いです」と受賞の言葉を代読した。

「笹本恒子写真賞」授賞式

続いて第2回 笹本恒子写真賞の授賞式が行われ、カンボジアの子どもたちをテーマにした一連の写真が受賞作となった足立君江さんに、松本副会長より表彰状と副賞が授与された。

選考委員の椎名誠氏から「選考に挙がった候補者の写真は、30年前から近年に至るまで数多くの作品が集まり、賞の性格や基準を選考委員で話し合って決めました。受賞者の作品は、カンボジアの厳しい時代背景の中で、女性ならではの眼差しで、現地の子どもたちに未来を託す写真を撮影した素晴らしい写真が多く見られた」と選考経過と足立君江さんの受賞理由を述べられた。

足立さんからは「今までコツコツと撮影してきたことが評価されて嬉しく思います。2000年に初めてカンボジアに行ったとき、子どもたちが遺跡でも市場でも目を輝かせて働いている姿を見て撮影しようと思いました。現地の孤児院にも行ってみると、子どもたちは私に明るく接してくれましたが、現状はそればかりではなく人身売買の犠牲になったり、亡くなられた子どももいる現実を知りました。このまま写真を撮り続けていいのか自問自答を繰り返しましたが、写真の力を信じて撮り続けました。被写体になった子どもたちが、今では成人した姿を見て、写真を撮り続けてきてよかったですと実感しています。子どもたちの成長とともに、私自身の写真人生を過ごし、子どもたちに教えられた時間でした。これからもカンボジアの村の人たちに寄り添って、コツコツと撮影

を続けて
いきたい
と思いま
す。作品
を制作で
きたの
は、自分

だけの力
選考委員椎名誠さんの講評 受賞者の足立君江さん
によるものではありません。子どもたちと共に私の写真
人生がありました。これからも笹本さんのように頑張っ
ていければと思っています」との言葉があった。

笹本恒子名誉会員は、出席してコメントを述べられる予定だったが欠席されたため、メッセージを笹本さんの姪の野村エミ子さんが代読した。

壇上に登った皆さんの記念撮影も行われ、授賞式が終了した。

第2回 「笹本恒子写真賞」 授賞式に寄せて 名誉会員・笹本恒子



皆さんこんばんわ。本日の式典に出席して皆さんにお会いできるのを楽しみにしておりました。大変残念です。この一年は医者に行ったのは眼医者だけですこぶる元気でしたが昨年と全く同じ時期に又、風邪をひいてしまいました。写真家協会の皆様には突然の欠席で昨年同様ご迷惑をおかけしました。心からお詫び申し上げます。又、今年度笹本恒子写真賞を受賞された足立君江さんには、本日ぜひお会いしたかったのですがとても残念です。近いうちにお会いできる別の機会があればと思っています。

今年9月1日に104歳になりました。車いすの生活の為これまでのように写真機片手に外を飛び回ることはできませんが、今年は友人にお願いして蔵書の中の一冊『モデルアーニ写真集』の復刻版を出してもらいました。原本はパリで出版されて90年以上経っている写真集です。絵画の好きな方にぜひとも目を通していただきたい本です。少し価格が高いですが、内容をご覧になればご満足いただけると信じています。

これから寒さがどんどん増していきますが皆様ご体調維持にはくれぐれもご留意ください。私も今の風邪を早く治して105歳をめざしもうひと踏ん張りするつもりです。

（代読・野村エミ子、抜粋）
(写真は9月の104歳の誕生日会にて、撮影：内堀タケシ)

平成 30 年度会員相互祝賀会

写真関係者が一堂にそろい「受賞・出版・写真展」などで活躍された会員を相互祝福

第 44 回「日本写真家協会賞」贈呈式と、第 14 回「名取洋之助写真賞」授賞式、第 2 回「笛本恒子写真賞」授賞式に統いて、平成 30 年度会員相互祝賀会が例年と同様に開催された。

開会に先立ち、まずは恒例の全体記念撮影を実施。小林みのる会員の巧みな話術を駆使しながらの撮影は、参加者を和ませるものとなった。

撮影の終了後、松本徳彦副会長による日本写真家協会の概要紹介を織り交ぜた挨拶で祝賀会が開会。続いて日本写真協会会長宗雪雅幸氏による来賓挨拶が行われた。この挨拶の中で、宗雪氏は物理学者アルベルト・aigneau シュタインをいつも元気づけていたのは家族の写真であったというエピソードを紹介。会場に詰めかけた各会員をも勇気づける挨拶となった。

来賓の紹介に続き、今年度の新名誉会員として、富岡畦草、藤本俊一、常磐とよ子の各氏が紹介され、熊切会長から名誉会員証と金バッヂが贈呈された。続いて、出席

平成 30 年 12 月 12 日（水）於：アルカディア市ヶ谷

の協会会員外理事、監事、および名誉会員が紹介された。

乾杯の音頭ご発声をいたいたいのは贊助会員である山田商会の取締役社長志村哲文様。志村様からは「心を揺さぶる作品との出会いに期待したい」という言葉が寄せられた。

歓談の時間には、受賞者によるセレモニーと、これも恒例となった餅つきが行われ、つきたての餅がふるまわれた。柔らかい餅を頬張りながらの写真談義は、参加者にとって至福の時となったことだろう。

「カメラ雑誌 1 年分」「交換レンズ 1 本」など、いかにも写真家が集う会にふさわしい景品が当たる福引きが盛り上がりを見せた後、野町和嘉副会長の「写真を取り巻く環境は厳しさを増す一方だが、写真ジャーナリズムに育てられた私たちの務めとして、写真の素晴らしさを後世に伝えて行こう」と閉会の辞を述べ、会員相互祝賀会は幕を閉じた。

（贈呈式・授与式共に記／出版広報委員：池口英史）

撮影／出版広報委員：小城崇史）



会員相互祝賀会の記念撮影（撮影／小林みのる）



日本写真協会会長 宗雪雅幸 株式会社山田商会社長志村様による来賓祝辞 哲文様による乾杯の発声



30 年に受賞、出版、写真展等で活躍された会員



新名誉会員との記念写真



受賞者と熊切会長による恒例の餅つき



恒例の福引抽選会では豪華景品が多数提供された



笑顔の福引当選者たち



2019JPS 展のアピール

急速な進歩を続ける クリップオンストロボの進化

取材などで、機材の軽量化なども考えてクリップオンストロボで撮影する機会が多くなり、アクセサリーの充実も相まってクリップオンストロボの活用範囲が増えてきている。人物、料理撮影などでも活躍の場が増えているのも近年のクリップオンストロボの進化がうかがえる。クリップオンストロボの弱点と言っていたモデリングランプもLEDの採用により実現している。デジタルカメラになり高感度領域が強くなった分、ストロボの低光量発光も求められてクリップオンストロボの活躍する場面もますます増えてきている。

◆外光オートから TTL オートへ

フィルム時代からクリップオンストロボやグリップタイプのストロボを使っている人は多いだろう。ストロボのチャージを速くするためや大光量のグリップタイプのストロボには、240V × 2 の 0160W や 315V の 0210 の積層電池が使われていた。2008 年に松下電池工業が生産を中止して各電池メーカーも生産を中止した。代替え電池としてニッカド電池やニッケル水素電池などの充電式電池が販売されたが、本体自体も製造中止になり修理などの問題でクリップオンストロボに切り替わっていくことになる。

デジタルカメラになる頃には、調光方式もストロボで調整していた外光式オートから TTL オートになりクリップオンストロボが主流となった。クリップオンストロボの大光量化にともない外部電源に単三電池タイプやニッケル水素タイプが使われるようになった。

◆光通信から電波通信へ

カメラから離してライティングを行うオフカメラライティングでは、ワイヤード時代はメインライトにワイヤードでつなぎ、他のクリップオンストロボには、外付けで光スレーブで同調させて多灯ライティングを行っていた。光通信式無線接続では赤外線通信で多灯ライティングが出来るようになった。ロケ先などでシンクロコードが無くなり足に引っかけるようなことがなくなったのは良いが、物陰や傘バウンスで使用してい

る時など光を遮るような場合は通信が出来なかったりする場面に遭遇することも多く、受光部にアルミホイルをつけたりして対応することも多かった。テレビのリモコンをテレビに向けて操作しているイメージがわかりやすい赤外線通信の特徴である。その後、電波式無線が発売されて送受信に安定感があり主流になった。

通常は、受信機を内蔵したクリップオンストロボと制御やシンクロさせる送信機に分かれているが、従来のストロボを無線に対応させる受信機や送受信機も発売されている。イメージビジョンで扱っている Cactus V6 II をカメラ側とストロボ側につけると無線環境で使用出来る。オリンパスやストロボ専業メーカーのニッセンジャパンでも受信機をストロボ側に取り付けることで無線環境を構築することが出来る。

無線通信で必要なのが技術基準適合証明。通称、技適マークが記載されていないと電波法違反になる場合があるということです。気をつけないといけないのが電波法についてである。製造者、販売者には電波法が適応されないので、使用者に電波法が適応されるということ。今でも海外からインターネットで購入した物や国内でも技適マークのない物もあるので購入時に注意が必要である。

◆リチウムイオン電池の採用

チャージが速く、容量も大きいリチウムイオン電池の採用により電池交換のタイミングが伸びたのとリサイクルタイムが短くなったことによりシャッターチャンスを逃すことが無くなった。積層電池を肩にぶら下



技適マーク。マークと認証番号が記載されている事が大事。



Profoto A1、Air Remote TTL。リチウムイオン電池対応。アクセサリーが充実。



GODOX V860 II、AD200、Xpro-C。KPI から発売されている。早くからリチウムイオン電池に対応している。

げて撮影していた感覚で外部電源無しで環境が手に入るのは、リチウムイオン電池の特徴である。

◆各社ユニークな特徴で展開

基本的に各社無線接続でも TTL 対応になっているが、イメージビジョンから出ている Cactus RF60X はマニュアルストロボであるが、V6II で制御することにより TTL 撮影が可能になった。スタジオ用大型ストロボで信頼を得ている Profoto や中国メーカーでいち早くリチウムイオン電池を採用した GODOX などは、リチウムイオン搭載のモノブロックもクリップオンストロボと同じように制御出来る環境を提供している。モノブロックの大光量とクリップオンの手軽さを同一ワークスペース内で制御する事が出来るのはありがたい。

GODOX は完全にオフカメラを考えてホットシューを無くして大光量化して、ストロボヘッドもフレネルレンズのついたヘッドから大型ストロボのようなベアバルブタイプに切り替えられるようなシステムを作り上げている。

クリップオンストロボは、コンデンサーに電気を溜めて一気に放出するため雨の日などの取り扱いには気を付けないといけない。ちょっと間違えれば水でショートして壊れてしまうだけならまだ良いが、感電する恐れもある。そんな時に安心出来るのは、防滴機能がありがたい。キヤノンやオリンパスは防塵・防滴対策がなされている。特にオリンパスの新機種 FL-700WR はより強固な防滴対策がなされていて OM-D E-M1X との組み合わせで雨の日対策は安心出来る。

クリップオンストロボのもう一つの弱点である連続発光時の熱で、ある一定回数や温度検知で発光間隔が長くなったり発光しなくなったりする保護回路があるが、発光しなくなるとシャッターチャンスを逃してしまうことになる。熱対策が Profoto A1 やニッシンジャパンの MG10 などはされており、熱で止まるということが無くなつた。

キヤノンは 470EX-AI でバウンス機能を AI 化して自動的にバウンスをしてくれる。

今後も目の離せないストロボ時代がやってきた。

(記／出版広報委員：川上卓也)



Canon 600EX II-RT、430EX III-RT、ST-E3-RT。600EX II-RT と ST-E3-RT は、防塵・防滴性能が特徴。



オリンパス FL-700WR、FC-WR、FR-WR。コマンダーとレシーバーも用意されていて、防塵・防滴・低温対策がなされている。



Profoto と GODOX は、クリップオンストロボと一緒にモノブロックストロボも制御出来る。



Cactus RF60X、V6II。イメージビジョンが取り扱っている送受信機と受信機内蔵マニュアルストロボ。



MG10、Air10s。ニッシンジャパンから出ているクリップ式ストロボとコマンダー。リチウムイオン電池対応。



Canon 470EX-AI。バウンス撮影を AI 化してオートでヘッドを動かして自然な光にする。

セミナー研究会レポート

◆平成30年度第2回技術研究会報告◆ ギャラリーディレクターが語る 写真展示の基本

平成30年12月5日(水)

JCIIビル6F会議室 参加者61名

講師:篠原俊之 (Roonee247 fine arts ディレクター)
秋山 治 (株)フレームマン 取締役営業部長

まずは株式会社フレームマンの秋山治氏が、展示技術や仕上げ方のバリエーションについてプロジェクトを使わず、実物を使った講演をした。

最初はオーバーマットの厚み、色の紹介。続いて裏打ち。オーバーマットの浮きや写真の波打ちを防ぐ為、しっかりした素材(見本はアルミ)が必要で、実物を見ると確かに平面性が良い。

次は額。自宅やオフィス等で飾る場合、低反射アクリル、低反射ガラスを使う事が多いという。無反射ガラスや無反射アクリルは作品が曇って見える。透明アクリルは照明などの乱反射が多いという。フレームは狭額縁のアルミフレームを使う事が多いとの事。実物を見ると確かに低反射の方が見やすい。また写真を引き立てる為にも狭額縁の選択は理に適っている。

見せる加工方法として3つの展示法を紹介。木製パネルによる展示法。アルミの複合板やゲータフォームを使用し、背面のゲタで2~3cm浮かせる展示法。透明アクリルに写真を張り付ける(フォトアクリル加工)展示法。秋山氏はカジュアルという言葉を使ったが、個性を出せる展示法である。

展示の話は、口頭とテキストによる解説。高さの目安は145cm。作品を見てほしいセンター合わせや、キャプションやタイトルが見やすい下面合わせ等の話があった。高さの意味など、専門性を感じる解説である。

次に、Roonee247 fine artsの篠原俊之氏(写真上)が、展覧会の見せ方について90分。紙面の都合上「写真の並べ方」の中から「写真集の順序と展示順は大抵一緒にならない」という話に絞って記す。例外として時間軸で流れていく作品はあまり変わらないとの事。「本は、ページをめくれば前に見たイメージは消える。次のイメージが表れるという事を繰り返す。ギャラリーは空間に入ると、人によっては後半のクライマックスが見えたりする。展示の場合、厳密な順序付けは役に立たない。それよりは、入って最初のゾーンは何を入れよう。次は何を見せようという、ゆるやかなゾーンで捉えていく。各ゾーンでどの写真に一番注目してもらおうか、緩やかなルール作りをし

て構成を考える方がやりやすい」と、本とギャラリーのメディア特性の違いから写真の順番が変わるという話を明快な言葉で語る。更に「作品の中から絶対に削れない3枚を選び出し、どのゾーンで見せるのか。この3枚を引き立たせる写真はどれか。この3枚が見る人の心に残れば作家の勝ち」と、構成の極意を語った。篠原氏の長年の問い合わせと思考と経験を経た答えである。

参加者に話を聞くと、来週展覧会なので丁度良いという声。ギャラリー担当なので他のギャラリーの話を聞く機会は有難いという声があった。 (記/野田知明、撮影/佐藤健治)

◆平成30年度第3回技術研究会報告(関西)◆

フォトショップの新機能と ライトルームの使い方セミナー ~写真家の為の作業短縮化講座~

平成30年12月18日(火)

大阪市立総合生涯学習センター6階 第2研修室 参加者50名

講師:大倉壽子氏 (アドビシステムズ(株))

大倉氏の軽妙なトークで口火を切った前半の講座では、先ずLightroomCC(以下CC)とLightroomClassic(以下LC)とPhotoshopCC+Bridge(以下PS)の特色をそれぞれ述べられた。各アプリとも同じ機能をもって補正をするがアプローチの仕方に差異がある。CCはクラウドを通じてスマホやタブレットで出先でもカジュアルに使え、かつ整理に向いており操作は一番直感的。LCもクラウドからの読み出しも行えパノラマ合成も可能。腰を落ち着けて1枚の絵を作り出すに向いている。またテザー撮影ではキヤノンかニコンのカメラであればカタログに直接読み込むことが出来る。PSはローカルディスクから読み出さなければならず、整理に関してはBridgeを

介在しなければならないが多枚数をより細やかに調整することが可能でよりシビアな現像に向いている。次に印刷に関してのカラープロファイルの話があった。従来ではjapan color 2011 coatedだったが2015年以降はjapan color 2015 coatedになり、紫や黒の表現が滑らかになったとのこと。ただしデフォルトではないので再設定して埋め込む必要があると氏は話した。

後半はAIが搭載されたPSで「人物の部分を切り抜く」「切り抜きツールを使って横位置の写真を縦位置にする」「欠けた部分をコンテンツに応じて自動補完する」「クリッピングマスク」などのデモンストレーションが行われ、参加者から感嘆の声が上がることもしばしばあった。

質疑応答は時間いっぱいまで積極的に行われ動画セミナーの要望の声も上がった。 (記/二村 海、撮影/永野一晃)



page2019 オープンイベント
 ◆日本写真保存センターセミナー◆
写真フィルムのデジタルアーカイブ
 —デジタル化による利用・検索の可能性—
 平成31年2月6日(水)
 池袋サンシャイン文化会館7階 710号室 参加者:73名
 講師:丸川雄三(国立民俗学博物館准教授)

はじめに日本写真保存センター代表 田沼武能による挨拶があり、日本写真保存センター設立に至る当時の状況の説明や設立の経緯、写真フィルム保存の必要性と現在の活動状況等が簡単に報告された。

講演前半は、松本徳彦 JPS副会長による「写真保存センターの活動—収集・保存、データベースの構築」と題した現在の写真保存センターの活動状況の具体的な報告で、2007年より11年間収集活動の現場で目にした様々な写真フィルムの保存状況を、収集時に撮影した写真画像と共に説明された。



保存されていた場所の環境によって写真フィルムには様々なダメージが加わっており、特に写真フィルムに多い劣化である「ビネガーシンドローム」は、夏期に高温多湿になる日本では極めて起こりやすい劣化現象で、最終的にはフィルムベースが分解し崩壊してしまうという、大変厄介な現象であるということ。また、汚れやホコリを嫌って密閉されたポジフィルム収納BOX内で保存されたことが通気性を悪くし、劣化の進行を早めるといった結果になっていることも説明された。

保存場所の環境以外では、写真フィルムを包んでいる包材にも注意が必要で、酸性紙の包材や発着が起きやすい樹脂系の包材の使用は避け、中性紙製の包材への交換を勧めている。そして、写真保存センターが収集した写真原板は、包材等の交換を行った後、低温低湿(10°C、40% RH)の環境が維持された国立映画アーカイブ相模原分館のフィルム収蔵庫に保存していることも報告された。

休憩を挟んで講演後半は、国立民俗学博物館人類基礎理論部研究部准教授の丸川雄三氏により「写真原板情報のデジタル化—利活用の範囲を広げる」と題して、デジタルアーカイブとは何か、デジタル化することのメリット、利活用の可能性、等について解説された。

デジタルアーカイブとは何か、写真原板情報をデジタルデータで記憶することで、写真原板にある情報をスキャナやデジタルカメラで画像データとして入力、文字情報をテキストデータとして入力し、デジタル化することから始める。デジタル化のメリットは、(情報の高密度化による)場所の節約やコンピュータ上での計算が可能となる。検討事項としては、質的な変化による永続性への懸念、一覧性の低下や維持コストの増大がある。

デジタルアーカイブは電子記憶であって、通常のアーカイブの意味である記録とは違う、例えて言えば一夜漬けのような感覚の存在である。これは、その時点での活用に適した状態に置き換えるだけで、その状態が百年先まで通用するとは限らないということ。あくまで現時点での活用目的であって、元となる写真原板の保存が疎かになることがないようにしたい。そういう意味でもデジタルアーカイブは、一時的な記憶に留めておきたい。

次に行なうのは、デジタルアーカイブのデータベース化で、電子記憶に索引をつけて目録を作成する作業だ。手法としては、項目立てやタイトル付け、画像にIDを付与するなど。データベース化のメリットは、データベースによる検索が可能になり、アーカイブの客観性が増し共有できる。検討事項としては、膨大かつ緻密な作業が必要で汎用性と合目的性のトレードオフが課題となる。

さらに利活用を進めるためにはコンテンツ化が必要となり、検索結果に新たなタイトルや文章などを付け、独立した記事にする。事例としては、常設・企画展のカタログ制作やウェブサイト、デジタルビューアーの作成など。メリットは、アーカイブの利用促進や調査研究の成果を社会に還元することにもなる。検討課題としては、分野専門家の監修が必要な場合もあつたり、著作権、肖像権など権利問題への対処が必要になる。

続いて、国立民族学博物館データベースで実際に作られている「近代日本の身装文化」から「身装画像データベース」にある項目検索を使って、実際に作られたコンテンツの内容を操作しながら説明された。画像の解説情報(テキストデータ)や研究者のコメントなどを追加することで、データベースの記述と画像との対応に広がりを持たせ、検索ワードでの応答も良くなることである。また、国立美術館「遊歩館」のコンテンツや博物館等に設置されている様々なデジタルビューアーの実例や内容についても紹介された。

最後に「後世に遺したい写真」展の作品を例に、写真画像から読み取れる撮影当時の社会状況や様々な情報、写された写真原板には当時の貴重な資料が残されている、ということを解説された。



講演後の質疑応答では、亡くなられた作家の作品公開での遺族への対応の注意点と小規模な地域での写真保存と利活用の問題、セミナー講演内容の提供について、アルバムに張り付いてしまった写真への対応、表題の付いてない画像の管理について、などがあり、其々について具体的な対応策が示された。

当日、用意した「後世に遺したい写真」展 図録とJPS会報連載「日本写真保存センター」調査活動報告 冊子は募金活動に協力いただいた方々にお預けした。活動に対する関心の高さがうかがえるセミナーであった。(記・撮影/小池良幸)

Message Board

◆三穂雪舟（1991年入会）

本年も又、冬が来ました。毎年、冬になると、天の川と霧氷を撮影することが目的となります。天の川は、やはり夏の頃が良いのですが、冬も又良いもののです。但し天気と時間と行動がピッタリしないと、どちらも撮れないと、毎年冬は霧ヶ峰か白樺湖か聖高原に行っています。簡単には撮れなく、白樺湖では撮ることに成功しましたが、霧ヶ峰の高原霧氷はなかなか撮れません。何とか出会いたく、毎年冬は、霧ヶ峰の方面に通います。



（東京都狛江市在住）

◆金城真喜子（2007年入会）

「パシリ楽しんでいます」

2018年10月14日朝9時、私はフラーーデザインスクールでインターンという名前のパシリをしていました。

写真的仕事をする中で時々よぎっていた、どこかで芸術関係の勉強をすればよかったという思いを解決すべく4年前にフラーーデザインスクールに行くことにしたのです。

年とってもからの学びなので残り少ない日々を考え、普通の人の2倍速でカリキュラムの習得をめざしていました。進んでいくうちにいつの間にか講師の試験を受けることになり、そのための対策としてフラーーデザイナーの先生のお手伝い（インターン）をするという経緯になったのです。

朝、今日行われる授業の項目、たとえば1講座目は「野菜と花のハーモニー」2講座目は「ネストリースボケー」、3講座目は「スプレイシェーブ」と確認し、受講する生徒数と花材その他の数合わせをします。彼らが予定どおりならばいいのですが、そうはいかず補講が入ったり休みの生徒さんがいたり一筋縄ではありません。授業に使用する教材、参考書の準備もあります。講義が始またら生徒さんの様子をさりげなく見て困ってそうならば手伝って、そこそこところで次の花材の準備というのを3回以上繰り返し、床掃除と片付けをして9時間あまりが過ぎ、手洗いしながら鏡を見ると化粧もはげて髪も乱れての一日が終わるのです。（東京都世田谷区在住）

◆水本俊也（2010年入会）

写真を生業とするようになって20年になる。初めての仕事場は船上（客船）であった。客船写真師としての専属乗船は3年間。その後も折に触れ、撮影や取材で客船と関わり、現在に至る。これまで海外100の国や地域をカメラ片手に駆け回ってき

たが、2011年の東日本大震災を境に、自然と日本に目が向くようになった。海外を歩けば歩くほど、様々な人々に出会えば出会うほど、自分の日本に対する認識と知識の不足を感じることが多かった。

震災後数年は足繁く東北に通ったが、前後して通い始めた郷里・鳥取には海も、山も、里も、自然全てが存在することに気が付いた。食もあり、文化もある。ないものはないと言い切れるほど、日本的な場所だった。

今では撮影に加え、写真と（因州）和紙の可能性を追求している。誰でも写真が撮れる時代、質感や空気感を伝えるモノとしての価値を見出している。折に触れ、和紙職人（伝統工芸士）の元へと通う日々が続いている。（神奈川県横浜市在住）

◆飯田秀雄（2005年入会）

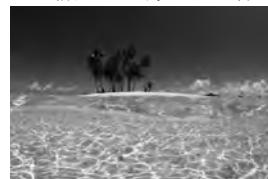
産経新聞群馬版ですが連載を3年9ヶ月間行なった。12月2日で終了したが月に一度の原稿「写真と文」は私にとって悪戦苦闘の日々で仕事もあり大変な作業でした。締め切り間近になると決まって頭痛がした。途中読者から励ましの言葉など無ければ挫折したかも知れません。心に勇気を頂いた事に感謝の気持ちです。私は筆を置いてもカメラは置きません。体が動く限り作品を撮り個展につなげたいと考えています。妙義「さくらの里」です。

（群馬県富岡市在住）

◆吉野雄輔（2001年入会）

死ぬ前に一度は訪れたいたい場所、ミクロネシア連邦チューク諸島、ファンナン島（現在のジープ島）。先日現地でお世話になっている末永卓幸さんファミリーが遊びに来てくれました。

この写真は、島の写真としては、一番売れた写真では？！と思ひます。その昔某ライブラリーで、数年、年間トップ1位に輝いておりました。前回もこの島のことを書かせていいただいたのでですが、ぜひ写真を見てもらいたいと、添付します。写真をご覧いただけると、納得できます。



（東京都世田谷区在住）

◆宅間國博（2016年入会）

自分が好きな写真家と同じテーマで撮り、一緒に写真展ができる。そんな機会を提供したら、最高にワクワクしてもらえるのではと、2018年に「Enjoy the viewpoint（視点を変えれば街中が美術館）」というテーマで作品を募集し、その中の23名の方と一緒に写真展を開催しました。写真展を

開催したくても、ノウハウがわからずできなかった人に、写真展の楽しさを味わってもらうことができました。これを機に他の写真家さん達も同じような写真展を開催してもらえたなら、全国の写真ファンの夢が叶うのではないかと思います。参加者からの強い要望もあり、2019年秋に第2回目の開催が決まっています。

（東京都渋谷区在住）

◆櫻井 寛（1992年入会）

櫻井寛写真展「ザ・カナディアン」を2月8日～13日（東京）、2月22日～28日（大阪）のオリンパスギャラリーにて開催しました。今から42年前の1977年10月、私が初めて訪れた国がカナダで、初めて乗った列車が大陸横断列車「ザ・カナディアン」でした。以来、海外の鉄道に魅了され今日まで世界の鉄道を撮り続けてきたわけですから「ザ・カナディアン」は進むべき道を教えてくれた人生の恩人というわけです。嬉しいことに「ザ・カナディアン」は今も走り続けています。カナダ鉄道の魅力をご覧いただけましたでしょうか。



（東京都渋谷区在住）

◆太田有美子（2017年入会）

先日、思いがけない場で自分の撮影した写真に出会った。それはお通夜の祭壇の上に置かれていた。亡くなられたのは近くに住んでいた独り暮らしのおばあさん、介護付きの老人ホームに移られたばかりで、突然の計画だった。写真は少し前に散歩中に撮らせてもらったスナップで、記念としてプレゼントしたものだった。それがまさか遺影になるとは思ってもみなかつた。手元で大切にしてくれていたと思うと自然に涙が溢れ出した。改めて写真が繋ぐ不思議な力と縁を痛感する。常にこれが最後の瞬間という意識でこれからもシャッターを切りたい。（神奈川県逗子市在住）

◆マツシマススム（1983年入会）

琵琶湖幻想 55 しらさぎ

私が白鷺と出会ったのは、1964年に琵琶湖を訪れた最初の日だった。

白い鳥を見ても白鷺とは知らず、後日知ったのは写真界で著名な田中徳太郎氏の白鷺の写真からだった。撮影で必ず見る湖岸や水辺の白い鳥が白鷺だった。

田中氏の圧倒される作品に感動を覚えたのもその頃だった。竹生島のコロニーには山一面に白い白鷺が生息していた。白鷺達のコロニーを画面いっぱいに撮影した

私の作品は大先輩の田中氏には及ばなかったが少し近づいた気持ちになり、益々白鷺の撮影に夢中になった。以後今まで琵琶湖をテーマに55年。新元号に入る前、自分の人生の総決算として写真集を出版することにした。

(大阪府寝屋川市在住)

◆山口一彦 (1994年入会)

昨年12月に静岡新聞社から『鹿が舞う町』写真集を発売。私の3冊目の写真集。この写真集は、私が出版した室蘭の写真集が縁で、静岡県川根本町出身者が、町を紹介してくれたことで撮影。この地域の小さな町の徳山地区に二つの重要無形民俗文化財の祭りがあることに驚き、一生懸命に文化を守っている人達がいることに感動し二年間通った。川根本町は日本三銘茶の一つ川根茶と大井川鐵道のSLで有名であるが、小さな町のお祭りなどは、あまり知られていない。世の中に知られていないものをしていくことが写真家の使命ではないだろうかと思って撮影した。



(東京都北区在住)

◆池田 勉 (2012年入会)

世界遺産の纏わる『長崎・天草潜伏キリスト教徒の里』の写真集発刊
1549年、日本に伝来されたキリスト教歴史の中で、その信仰が禁止された1614年以降、凡そ250年の長きに亘ってキリスト教徒(キリスト教信者)たちは弾圧、迫害されながらも密かに信仰を承継してきた物語があった。

これらの一端は「長崎と天草地方の潜伏キリスト教徒の里」と題して2018年7月にユネスコの世界文化遺産に登録されている。

その一方で下名は禁教時代、辛苦に耐えキリスト教信仰を捨てなかつた所謂潜伏キリスト教徒の里に残る遺跡をはじめ彼らの面影や足跡などを長年に亘つて取材した作品を取り纏めて『長崎・天草潜伏キリスト教徒の里』



『祈りの里』と題する写真集を発刊し、それらを写真で後世に残すことができた。

この写真集は縦横27cmで216頁に269枚の写真を収録し、歴史的な解説を加え、上記世界遺産登録と同時期に朝日新聞出版から発刊している。

(長崎県西彼杵郡長与町在住)

◆池口英司 (2016年入会)

2月15日に交通新聞社から『大人の鉄道趣味入門』を上梓致しました。

企画段階での書籍名には『60歳からの~』というものの候補にあって、私もこういう本を書く歳になったかと、ありがたいような、ありがたくもないような。けれども、執筆作業に入ると「この章は8000字書き足すように」という



ような指示が矢継ぎ早に入り、感慨に耽っているどころではありませんでした。いや~キツかったです。悠々自適は夢のまた夢のまた夢。

(神奈川県横浜市在住)

◆おちあいまちこ (2015年入会)

八木重吉をご存知でしょうか。

宮沢賢治、金子みすゞらと同時代の詩人です。中学の頃から読み親しんできた私は、誰もが知る詩人と思っていましたが、周りに聞いてみると知らないという人が多く残念でなりません。八木重吉は29歳の若さで幼い子どもたちを遺し結核でこの世を去りました。死後発表された詩集は「秋の瞳」だけで、3000編近くある詩の多くは死後発表されました。

ねがい

きれいな気持ちでいよう／花のような気持ちでいよう／報いをもとめまい／いちばんうつくしくなっていよう

短く素朴なことはの中に美しさ、やわらかさ力強さを感じます。本を通して多くの方が八木重吉の詩と出合うことができま



すよう

にと願っています。



中では、イスラム教徒の子どもたちが通うキリスト教系の学校

がありました。またイエス・キリストが十字架にかけられ、葬られた場所とされる「聖墳墓教会(エルサレム)」の扉を、現在まで900年近く開け閉めするのは、イスラム二家族です。これも宗教が原因の紛争を防ぐための知恵でした。世界各地で実践される、22のダイアローグ(対話)を収めた写真集。

写真は表紙にも使用した「アヤ・イリニ大聖堂」で、アヤ・ソフィアのすぐ隣に建っている、アヤ・ソフィア以前に建てられた旧大聖堂です。

(東京都多摩市在住)

◆横塚真己人 (2005年入会)

季節のごちそう『ハチごはん』

『ハチごはん』は昆虫食をテーマとした写真絵本です。昆虫食について調べてみると、驚いたことに日本の40都道府県でイナゴやハチの子、カミキリムシの幼虫、カイコの蛹、セミ、ザザムシなどが食べられてきたという記録がありました。そのすべてを調べてみるのも面白そうですが、この本では「ハチの子」だけにスポットを当てて取材をしてみました。ハチの子を食べるということは特に珍しい話題ではないのですが、取材を進めていけばいく程に、知らなかつたことがたくさんあって面白かった。1センチほどのクロスズメバチの撮影は、ピントがシビアなのでなかなか手強かった。興味のある方は是非ご一読してみてください。



(神奈川県横浜市在住)

◆山縣 勉 (2012年入会)

新しい写真集『観察(SURVEILLANCE)』が出版されました。動物を検知すると自動的にシャッターが下りる動物監視用のカメラを女性たちに預け、自宅で記録された膨大な写真群を編集したものです。写真家不在の写真とも言える本作はポートフォリオ型のボックスに収められています。赤外線撮影による独特のモノクロ画像には、孤独に社会と向き合う姿、莊嚴ともいえる生の姿が写っています。是非たくさんの方に手にとっていただきたいと思います。



(東京都目黒区在住)

◆桃井和馬 (2013年入会)

『和解への祈り』桃井和馬著 日本キリスト教団出版局 2000円+税

世界各地で不宽容な出来事が次々と噴出しています。相手を認めないやうな態度が、人類史の中では、争いへと日常的に発展したのです。同時に、それを回避するため、不斷の努力を続け、異なる存在との和解に努めてきたのも人間でしょう。ヒマラヤの

J P S ブック レビュー

協会に寄贈された会員の出版物を到着順に掲載致します。
(2018・9月～2019・1月)
①発行所 ②発行年月
③サイズ (タテ×ヨコ)、頁数
④定価 ⑤寄贈者
⑥電子書籍ストア



死ぬにはいい日

渡辺英明

①渡辺英明 ②2018年8月
③21×21cm、64頁 ④3,000円
⑤渡邊知子氏



マダガスカル

富山愛子

①東方出版 ②2018年9月
③22×21cm、47頁
④1,500円 ⑤富山氏



世界が注目する南の島 やんばるの森

湊和雄

①少年写真新聞社 ②2018年10月
③19×26.3cm、48頁 ④1,500円
⑤湊氏



渡良瀬の風景 I・ 葦簾づくり

亀田昭雄

①アトリエ Winds ②2018年9月
③14.8×21cm、30頁 ④3,000円
⑤亀田氏



国宝 柏尾山 大善寺 開山千三百年記念写真集

佐藤真樹

①大善寺 ②2018年10月
③22.7×30.3cm、72頁
④一円 ⑤佐藤氏



揺れ動いた'60年代

熊切圭介

①「ドキュメンタリーフォトフェスティバル宮崎」実行委員会 ②2018年10月
③18×21cm、32頁 ④一円 ⑤熊切氏



LONESOME COWBOY

佐藤秀明

①ボイジャー ②2018年10月
③21×29.7cm、123頁 ④4,800円
⑤発行所



辺野古 海と森がつなぐ命

中村卓哉

①クレヴィス ②2018年9月
③25.2×17.5cm、194頁
④2,315円 ⑤発行所



季節のごちそう ハチごはん

横塚眞己人

①ほるぶ出版 ②2018年9月
③26.5×20.5cm、41頁
④1,500円 ⑤横塚氏



風の村

桑原史成

①生活クラブ風の村 ②2018年10月
③22.3×15cm、80頁
④1,500円 ⑤桑原氏



悠久の日本人のこころ 磐座

山村善太郎

①求龍堂 ②2018年11月
③30.3×21.7cm、112頁
④3,600円 ⑤山村氏

 <p>和解への 祈り 桃井和馬</p> <p>①日本キリスト教団出版局 ②2018年11月 ③15.5 × 21.7cm, 96頁 ④2,000円 ⑤発行所</p>	 <p>OYAKO An Ode to Parents and Children ブルース・オズボーン</p> <p>①Sora Books ②2018年11月 ③21.5 × 21.5cm, 144頁 ④1,580円 ⑤オズボーン氏</p>	 <p>鹿が舞う町 山口一彦</p> <p>①静岡新聞社 ②2018年12月 ③19.7 × 26.4cm, 96頁 ④3,000円 ⑤山口氏</p>	 <p>モノクロームの私鉄原風景 諸河久</p> <p>①交通新聞社 ②2018年12月 ③25.7 × 19cm, 152頁 ④2,800円 ⑤発行所</p>
 <p>フクシマノート 小林 恵</p> <p>①冬青社 ②2018年10月 ③26 × 27cm, 96頁 ④4,500円 ⑤小林氏</p>	 <p>奄美・琉球 深澤 武</p> <p>①青青社 ②2018年7月 ③17.5 × 25.7cm, 96頁 ④2,000円 ⑤深澤氏</p>	 <p>うつくしいもの 八木重吉信仰詩集 写真・おちあいまちこ</p> <p>①日本キリスト教団出版局 ②2018年9月 ③19 × 14.8cm, 78頁 ④1,200円 ⑤おちあい氏</p>	 <p>中日平友好条約締結 40周年記念「日本印象」 馮学敏</p> <p>①馮学敏写真展実行委員会 ②2018年 ③21 × 21cm, 113頁 ④1円 ⑤馮氏</p>
 <p>沖縄 その光と影の記録 竹中 勝</p> <p>①リープル出版 ②2018年11月 ③28 × 21cm, 152頁 ④3,500円 ⑤竹中氏</p>	 <p>FUKUSHIMA 小鳥はもう鳴かない 小柴一良</p> <p>①七つ森書館 ②2018年12月 ③29.7 × 21cm, 230頁 ④3,000円 ⑤小柴氏</p>	 <p>THE WHITE EGRET 55 しらさぎ 琵琶湖幻想 マツシマススム</p> <p>①日本写真企画 ②2019年1月 ③24 × 26.2cm, 144頁 ④4,300円 ⑤マツシマ氏</p>	 <p>40年後再回首 齋藤康一</p> <p>①新世語文化有限公司 ②2018年10月 ③37.5 × 29.5cm, 392頁 ④16000元 ⑤齋藤氏</p>

			
<p>最新犬種図鑑 写真で見る犬種とスタンダード 写真・中島眞理</p> <p>①インタースー ②2018年7月 ③30.3 × 21.5cm、224頁 ④5,400円 ⑤中島氏</p>	<p>世界の名門バレエ団 渡辺真弓 写真・瀬戸秀美、他</p> <p>①世界文化社 ②2018年12月 ③25.7 × 15.8cm、176頁 ④2,300円 ⑤瀬戸氏</p>	<p>カンボジア 里の民 足立君江</p> <p>①現代写真研究所出版局 ②2018年12月 ③23.2 × 18.3cm、136頁 ④2,500円 ⑤足立氏</p>	<p>昭和を駆け抜ける 林 忠彦</p> <p>①クレヴィス ②2018年11月 ③25.7 × 19.7cm、200頁 ④2,500円 ⑤林義勝氏</p>

寄 贈 図 書

駒澤蹊道殿 一石有響
 近藤誠宏殿 山下勝彦、監修:近藤誠宏・旅祈りの国へ
 増田貴大殿 NOZOMI 2018 [出発編]、着ぐるも人々 [サンブル版]
 交通新聞社殿 西森聰・そうだったのか、路面電車
 梅原淳・電車たちの「第二の人生」
 鈴木弘毅・全国「駅ラーメン」探訪
 風景写真出版殿 柴野清・余韻
 光村推古書院殿 岩宮武二、監修・近藤宏樹、榎並悦子
 美のかたち 岩宮武二の仕事
 JAGDA 殿 JAGDA 学生グランプリ 2018
 JAGAT 殿 印刷白書 2018

JCII フォトサロン殿 高円宮妃久子殿下・旅する根付
 鈴木育男・なつかしの昭和時代、森 喜之・朝鮮・1939年
 荒木経惟・愛のバルコニー
 ソニー殿 2016 SONY WORLD PHOTOGRAPHY AWARDS
 2018 SONY WORLD PHOTOGRAPHY AWARDS
 東京都写真美術館殿 杉浦邦恵・うつくしい実験 ニューヨークとの50年
 愛について アジアン・コンテンポラリー
 建築×写真 ここのみに在る光
 小さいながらもたしかなこと 日本の新進作家 vol.15
 二科会写真部殿 第66回展二科会写真部作品集
 日本写真作家協会殿 2018-2019「JPA 作品集」

受賞おめでとうございます。今後ますますの活躍をご期待申し上げます。(50音順)

■ 「東京都名誉都民」称号贈呈 平成30年10月1日



受賞者：笹本恒子（1950年入会）

日本初の女性報道写真家として活躍しました。女性の社会進出の先駆者として、また、100歳を超えた現在も活動を続けている姿は、人々に希望や活力を与えていた功績に対して。

■ 「藍綬褒章」受章 平成30年11月3日



受賞者：白鳥真太郎（2005年入会）

産業振興の功績に対して。

■ 平成30年度外務大臣表彰 平成30年7月24日



受賞者：杉山テルゾウ（1975年入会）

日本とモンゴルとの相互理解の促進に対して。

写 真 解 説

うつし世に浮かぶ花 (表紙写真) ————— 川島浩之

被写体の鍵田真由美さんは、本場スペインのフラメンコフェスティバルに出演依頼を受けるほどの日本を代表するフラメンコダンサーですが、彼女の真の魅力はその粹を超えたオリジナルの舞踊で常に身体表現の限界に挑む姿、それを支える日常の舞踊への全身全霊の生き方、精神性にあります。そしてその舞踊から、人間の魂の無限性、崇高性を感じることができます、そんな写真をこれからも撮り続けたいと思います。

(写真展「銀河のごとく フラメンコ舞踊家 鍵田真由美」)

I been walking all my life (表4写真) ————— HARUKI

イギリス南部のプライトンビーチで賑わう大勢の人々の中で見つけた一コマ。真夏の強い陽射しから逃げるようにコテナの日陰で休んでいたい父親と、相手にしてもらえないのでいじけてしまった少年。望遠レンズで遠くから覗いていても台詞が聞こえてくるような仕草をする親子ふたりの感情のコントラストが面白くてマンガの吹出しがちに台詞を入れたくなつたが、男性の気持ちを表すピッタシな言葉がすでにそこには書かれていたので必要なかった(笑)。

(写真展「遠い記憶。II」)

◆ JPS ギャラリー

鳥居焼聖火隊 ————— 佐藤真樹

山梨県甲州市勝沼町のぶどう祭、写真集『大善寺』に掲載したこの場面は「鳥居焼」に点火するための聖火隊。同寺に埋葬の先祖の靈を慰める意味が込められた鳥居焼は、10月第一土曜日大善寺で大規模な護摩供養で点火され勝沼中学生に引き継ぎ、170余名がぶどう畑の急坂な農道を一気に駆け上がる。背景には甲府盆地が広がり、観客は鳥居焼の壮大な絵巻を見るために燃え上がる炎を町から見上げている。

黒島天主堂 ————— 松尾順造

2018年に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」としてユネスコの世界文化遺産として登録された十二構成資産の一つ。長崎県佐世保市の西方海上約10kmの黒島にあるカトリックの教会堂。江戸時代後期に平戸藩が牧場跡の耕作移住を奨励したのに応じて、各地から潜伏キリシタンの家族が移住。表向き島の仏教寺院の檀家となるも、先祖からの信仰を守り続けた。現在も島の人口の約7割の600人ほどが潜伏キリシタンの子孫のカトリック信者である。

タイマイ ————— 中村卓哉

米軍の基地問題で揺れる辺野古。この海に通い続けて今年で18年目となる。昨年の12月14日、埋め立て工事が本格化し、美しい海に土砂が次々と投入されはじめた。最近では、護岸工事の影響で、ウミガメたちは産卵場となる砂浜へ辿り着けず、港の中に迷い込む姿も確認されている。

ユビエダハマサンゴが広がるこの場所にも、タイマイやアオウミガメなどの寝床がある。今後の埋め立て工事の影響が懸念されている場所だ。

江差町鷲島 (かもめじま) 瓶子岩 「へいしいわ」 — 山村善太郎

私は「磐座(いわくら)」及び、永年地方の方々から「神宿る岩」あるいは「石神さん」と崇められ信仰されている岩を全国各地300カ所余り取材してきました。神社が建立される前、古くは縄文時代から古代の人々が崇める「御神体」とは岩そのものであり、樹木、滝、そして島から山にまで至っています。いわば日本人の精神的原点である自然信仰のシンボルであります。大自然からの恵みの感謝と畏敬の念を抱いて永年「石神さん」をお護りしてきた地元の方々の厚い信仰の姿をも捉えさせていただきました。

沖縄 本土復帰から46年 その光と影の記録 — 竹中 勝

1972年5月15日に沖縄はアメリカの統治から解放されて本土復帰をはたしました。私はその日は本土からも沖縄本島からも遠く離れた石垣島のさらに中心部から離れた小さな集落にいました。那覇のような大きな街ではなく地方の人達の本土復帰に対して受けとめる素直な表情を見てみたかったという気持ちからでした。

祝賀トラックに乗り村の中を回る子供達のキラキラした眼の輝きは、今も忘れられません。

祈り ————— 小柴一良

3月も半ば過ぎたこの日は朝から冷え込んだ。「3.21 さようなら原発全国集会」を撮影するため代々木公園に向かった。会場に着いた頃には雪からみぞれに変わっていた。ステージの上から撮影していると一人の女性が目に付いた。下に降りて近づいた。登壇者の話を傾きながら、手を組み、熱心に聞いている。ファインダー越しに何かを祈っているように見えた。

夕方からのデモ行進は気象状況悪化にともない中止になった。

◆ FUJIFILM X ギャラリー

樹形に魅せられて ————— 宮沢あきら

秋は色とりどりの紅葉風景を求めて、高原地帯を彷徨う。

霧が漂う早朝、幻想的な樹形に出会った。ここは信州の山奥にある牧場。ひさし代わりの頭上の枝まで取り込むため、超広角のズームレンズを選択し画角を調整した。霧の中で見え隠れする色のない世界は、ACROSの階調が見事に生きる瞬間だと感じた。風に乗って刻々と変わるドラマに、しばしその場を離れることが出来なかつた。

19歳 ————— 横山 聰

春の風が、満開の桜の木の下をくるくると回っていた。母親の昔の服を着てカメラの前に立つ、なるせるなさん。20歳までの2年間を撮らせてもらっている。

彼女が学ぶノルウェーの民族楽器ハーディングフェーレ。その旋律に楽譜はない。何度も音を拾い、耳と指で覚えて奏でる。明確には記されていない場所へ、出会った人を頼りに向かう旅とどこか似ている。たどり着いた先はどれだけ美しいだろう。花びらがまた風に舞う。

軌跡 ————— 池之平昌信

快晴ではあるが、厳寒の屋外スケートリンクにX-T2とフジノン XF100-400 ミリ F4.5-5.6を持って出かけた。午後から夕方にかけ、太陽はグングンと傾いていく。整備を終えたばかりのきれいなコースの表面に、選手のストロークが一周ごとに刻みこまれていった。カメラの細かい設定をしている間に、この美しい瞬間を逃したくはない。迷わずVELVIAモードに設定すると、慣れ親しんだ「あの色」が即座に再現されたのだった。



中川 裕次 正会員

平成 30 年 7 月 2 日頃、逝去。58 歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(平成 19 年入会)

最期まで写真家だった中川さん

島田 聰

この遺影は「記憶のなかの自画像…カンボジアの帰りに立ち寄ったラオスでの一コマ…2001年」というキャプションと共に、中川さんが SNS にアップしたプロフィール写真ですが、そこには、中川さんの思いのこもった、こんな文も添えられていました。

…「このあと病気入院を経て現在に至ります。ぼく自身ある意味で非常に遠い過去のように思えるし、またこの日、この時、この場所で撮影していた実存でもあります。命の危機を体験してから自分の実存ということを考えるようになり、過去の実存の証明、そして現在の早朝散策時のシャドウに見る自身の実存を記録しています…病後、やっとある程度客観的に自分を見つめられるようになりました」…

中川さんは、この言葉に違わず、世界を放浪していた若い頃の写真、カンボジア等で精力的に撮影を続けていた頃の写真、そして、半年という余命宣告をされてから、奇跡のように持ち直し、良くはないながらも落ち寄っていた、闘病中の心象風景とでもいべき写真を、毎日の仕事のように記録し、SNS にアップし続けていました。

特に、この数年、日記のように綴られて来た、山科の自宅周辺で撮られた一連の作品は、きっと死を身近に感じる者だけが変わることのできる自然や命の営みが「シャドウ」の中で必ず輝き、隠している素晴らしい作品でした。本当に最期まで写真家だった中川さん、羨ましくらいです。

ご家族の方とは疎遠になってしまって、亡くなつてからの諸事等は同志社大学時代の友人たちの手で行われ、徒姉妹の方を通じ、去る八月、ご両親の眠る東山の墓所に納骨されたそうです。

末筆となりましたが、中川さんの訃報を書くにあたっては、きっともっと相応しい方がいらっしゃったかと思います。行きがかり上、私が原稿を認めましたがどうぞご容赦ください。 合掌



南 雄二 正会員

平成 30 年 9 月 1 日頃、逝去。60 歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(平成 5 年入会)

レモンちゃんまた写真教えて下さいね！

高尾 啓介

9月の祝日、長い呼び鈴の電話口から、「南雄二さんが亡くなられたのは御存知でしょうか?」と。南さんと十数年前、福岡で編集の仕事をしていた頃からの知人だと言う A さんからの電話だった。その A さんへ 9月 20 日頃、福岡県警から連絡があったのは、南さんの携帯着信履歴に、A さんが健康状態を気遣い電話したのが最後に記録されていたからだという。A さんが最後に南さんと会ったのは、福岡へ帰郷し自宅に土産を渡しに行った 8 月 10 日。何科目も悪くなり気持ちも落ち込んでいた様子だった。9 月に連絡を入れても出ない事に嫌な子感がしていた矢先の知らせだったという。先ずは誰かに知らせたいとの思いで、南さんのウェブサイト上に載っていた佐賀での写真学習プログラムの記事を発見し、その時の様子を楽しく話してくれた南さんを思い出し、一緒に学習プログラムを行った私の名前を調べ連絡をしてくれた。頑固で変わり者お人好しだった同年の南さん。親しくしていただいタライターの友人が十年位前に癌で他界してからは、友人らしい方の話はなかったようだ。京都から単身福岡へ住み始めたのが十数年前。学習プログラムを行う学校へ向かう車中で南さんが「フィルムからデジタルへ変わりゆく事に一枚の写真の重さが無くなりましたね」と口にしていたのを思い出す。世界百数十カ国を振り回り生きていた事、また、家族の事にも心を開き届話をしていた南さん。私も変わり者だからだろうか。写真の仕事をしなくなつてから数年は経つていると思われるが、飯は食えなくも写真家协会会员として最期まで貢いたいには、何か切なさと意地さえ感じる。学習プログラムの小学生たちにレモンちゃんの愛称で慕われ、「また教えに来て下さいね」「また教わりたいです」と人気だった南雄二さんのご冥福をお祈り致します。

カメラさげ

雲の彼方へゆく君を

窓を開いて

手を振る子たち



高橋 延明 正会員

平成 30 年 10 月 11 日、心不全のため逝去。
62 歳。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(平成 8 年入会)

大野 広幸 正会員

平成 30 年 10 月 30 日、逝去。59 歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(平成 15 年入会)

ちょっと酒が弱い弁論家

宮入 芳雄

高橋延明に会って三十年以上になる。最初は青山にあった貸しスタジオ「エイワスタジオ」の後輩スタジオマンとしてやってきた。どういう事かは分からぬが、出身大学の東京農業大学で桑原史成さんに写真の指導を受け、この世界に入ったとの事だった。意見をよく言う弁論家だったが、当時は酒に弱く、飲みに行くと自分の主義主張を述べると、こちらが反論する間も無くコチッと寝てしまう。奢り甲斐の無いこと、この上無い。

そんな縁で私の師匠、大久保泰伸の二代後のアシスタントになり兄弟弟子になつた。日本写真家協会に入会する時も私が推薦人になり、もう一人の推薦人は本人がクリスチヤンという事もあり、同じくクリスチヤンの菅井日人さんにお願いした。(最初に二人を引き合わせた時、二人の会話でキリスト教の専門用語が飛び交い、私には全く理解できなかったが……)

入会後は積極的に協会の活動に参加していた。最近あまり JPS ニュースで名前を見かけないと思っていたら、日本写真協会の方で活躍していたそうだ。最後に会つたのはいつだろ。数年前の JPS 総会後の懇親会だったろうか。心臓の具合が良くない、と話していたが、その時は元気そうだったので、あまり気に留めなかつた。しかし本人は長い間、その病と闘つてきたのだろう。それはご家族も……。

10 月 15 日に聖イグナチオ教会で行われた葬儀。出棺前の最後。奥さんは棺の延明に語りかけた。「お疲れさま。よく頑張つた」。それは延明への最大の賛辞であり、旅立ちへの激励の言葉だった。本にお疲れさまでした。ちょっと逝くのが早過ぎたけどね。

追悼

秦 達夫

大野広幸さんとは 2003 年新入会員展実行委員会で初めてお会いました。知り合いも少なく異業種の写真家との交流は緊張の連続でしたがが氣さくに声を掛けてくれました。「秦君は竹内敏信さんのお弟子さんなの?」。何気ない会話ですが「お弟子さん」と言う言葉遣いや鼻から抜ける声のトーンに優しさが含まれており、この人がいるならやつていいかなと安堵した事を覚えています。話を聞けば自衛隊を撮影しており女性隊員をテーマとした写真展も前年にキヤノンサロンで行つていました。自衛隊撮影はとても厳しい世界で規制が多く苦労が多い等の話をよく聞かせてもらいました。信念を持って被写体に取り組む強い心を持った人でした。ある時、大野さんの携帯電話が鳴ったのですが、その着メロが「亜麻色の髪の乙女」でした。この年は島谷ひとみさんが 1968 年 GS ビレッジ・シンガーズの曲をリバイバルしてブレイクしていました。だから島谷さんの曲ではなく青春の 1 頁のビレッジ・シンガーズの曲なのだと力説しているのがとてもお茶目でした。それから「川越には美味しいどんどんあるから食べにお出でよ」と誘われて家族でお邪魔したことがあります。綺麗な奥様と寄り添う姿が印象的でした。近年では佐渡島の朱鷺の撮影も行っており精力的な作家活動をしていました。「佐渡島にも大きな杉があるからガイドを紹介するので撮影に行こうよ」とお誘いを頂き「行きましょう」と約束もしていました。来年は 1 人で佐渡島に行こうと思います。明日のことは誰もわからない。今を一生懸命生きること。それが大野さんへの弔いになるのではないかと思い追悼の寄稿を書かせて頂きました。向こうで奥様と仲良く過ごして下さいね。さようなら。



堀江 克彦 正会員

平成 30 年 11 月 19 日、肺がんのため逝去。
77 歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(平成 2 年入会)

共に歩んだ年月を振り返って

杉浦 勉

堀江さんの写真集『喜木悠遠』を見ながら若いころのことを思い返しています。もう四十数年前のことになりますね。私達はそれぞれのライワーク作品を持ち寄って合評会を続けました。堀江さんは小菅村を取材地に選び「鮎を越えて・甲州北都留日記」として個展。やがて私達はサンシャインビル近くに事務所を構え、集まつては酒を酌み交わし写真談義をどれほどしたことか。

日本の島を撮る事になり、貴方は五島列島を取材、写真集『キリシタン街道』として出版されました。私も、雑誌の取材で何度か五島列島を訪問したが、そのたびに貴方が鳥島を丹念に取材されていたことを思い知らされたものです。

ある日、オリオンプレスから電話がありました。オランダの写真家エルスケンが来ているから会わせたいとのこと、夜には酒を酌み交わす席に。この席で堀江さんは、なんとかエルスケンに納豆を食べさせようと躍起。エルスケンも拒否し続けるのでした。なんとその様子の滑稽だったことか! 「今度お前たちの写真を見せろ」と言うことで席はお開きに。後日エルスケンが事務所に来て壁に貼つてあったユージン・スミスの写真展ポスターに、「I・LOVE・YOU」と書いて帰って来ました。

やがて、堀江さんは松下智教授と出会い「茶」の取材を始めました。いたいどの様に取材を進めゆくのだろうか? と思ったものです。

すでに、堀江さんは中国雲南省の山深く分け入り、茶の原木といわれる古木・老木・茶の栽培に関わる少数民族の暮らしを取材していました。その写真を目の当たりにしたとき、なるほどそうだったのかと納得し、感激したのでした。

いまごろ堀江さんは、雲南省の空の上から茶の古木・老木を眺め、茶を飲み交わしていることでしょう。安らかにお休みください。

編集後記

◎若い「色と恋」、失うものが大きい、それは直接の因果関係では無さそうだが、ドキュメント写真の盟友日君、苦節 15 年、偉大なる足跡を残しての写真雑誌[D]の休刊は惜しまれる。中国の先達たちは、「九何(きゅうじゆ)」の功を一賜(いつき)に酬(か)く」と言う語を残している。(秦原)

◎長年勤めた写真専門学校講師の職は、3 月の卒業式を以って定年退職となる。当初は、これほど長く務めるつもりはなかったが、気がつくと 17 年も経っていた。近年は、写真を学ぼうとする学生の気質も変化し、留学生も多くなった。対して、こちら側は学生との年齢や意識の差がどんどん大きくなっている。潮流などを感じつつも、終わるとなると何故か寂しい。(小池)

◎JPS 名誉会員の竹内敏信さんが郷土の岡崎市美術館に写真作品を寄贈された。その記念企画写真展と感謝状の授与式を取材させていただいた。半世紀に亘り日本の原風景を捉え続けた竹内さんの偉業をあらためて実感した。写真家としてるべき姿を垣間見たひとときであった。(飯塚)

◎毎年、年末年始は必ず旅行に出ていたのですが、今年は 3 社の締切が並んでしまい、1 月 1 日からひたすら字を書いていました。悔しかつたので 1 月の連休は毎日広尾界隈に出かけ、気分だけ正月旅行。食事は必ず現地で摃り、温泉の代わりに鶴巣に入つて、マーケットでお土産代わりの食材を買ひ込みます。これ楽しい。お金もかからない。次は神谷町か、小伝馬町を旅するつもりです。(池口)

経過報告(2018年9月~2018年12月)

- ◎9月26日~10月2日 平成30年7月豪雨被災者支援「チャリティー写真展」FM エキシビションサロン銀座
- 出品作家 147 名、出品点数 382 点、販売 124 点、販売金額 1,880,000 円、寄付金額 1,156,126 円
- 10月25日~11月24日 後世に残したい写真ー写真が物語る日本の原風景ー 光村グラフィック・ギャラリー 入場者数 1,100 名
- 10月27日 講演会「残された写真から何を読み取るか」 参加者 40 名
- 10月31日 第2回著作権研究会 PM2:00~4:30 JCII 会議室 参加者 84 名
- 「肖像権を学ぼう」~街の写真から人が消える前に~
- 11月10日 第12回 JPS フォトフォーラム AM10:40~16:10 有楽町朝日ホール 参加者 333 名
- 「テーマ、眼差し、写真の力ー三人の女性写真家の物語 バネリスト・大石芳野、田中弘子、安田菜津紀
- 12月5日 第2回技術研究会 PM2:00~4:30 JCII 会議室 参加者 61 名
- ギャラリーディレクターが語る写真展示の基本
- 12月12日 第44回日本写真家協会賞贈呈式 PM4:30~4:45 アルカディア市ヶ谷
- 受賞者・ソニーイメージングプロダクツ＆ソリューションズ株式会社
- 12月12日 第14回名取洋之助写真賞授賞式 PM4:45~5:00 アルカディア市ヶ谷
- 受賞者・鈴木雄介、やどかりみさお(奨励賞)
- 12月12日 第2回笛本恒子写真賞授賞式 PM5:00~5:30 アルカディア市ヶ谷
- 受賞者・足立君江
- 12月12日 平成30年度会員相互祝賀会 PM6:00~7:30 アルカディア市ヶ谷 参加者 376 名
- 12月18日 第3回技術研究会 PM2:00~4:30 大阪市立総合生涯学習センター 6 階第2研修室 参加者 50 名
- フォトショップの新機能とライトルームの使い方セミナー~写真家の為の作業短縮化講座~
- 12月20日~26日 第2回「笛本恒子写真賞」受賞記念展 アイデムフォトギャラリー「シリウス」 入場者数 590 名
- 足立君江写真展「カンボジアの子どもたちと」

◎昨年は私自身にいろいろな事が起り、今年は本厄という事でお払いにと思っていたが、なかなか時間がどれほどに至っている。一段落すれば行つてようと思う。さて、写真業界では月末から始まる CP+ に向けて動き出している。新製品もちらほらと発表されて、ワクワクする時期がやってきた感じが肌で感じている。買う理由を探すか、買わない理由を考えるか・・・。(川上)

◎「平成」が間もなく終わる、ニュースを振り返るテレビの特番を観てると、あれ? この事件は昭和じゃなくて平成だったっけ? と感じることもしばしば。考えてみれば、自分が生きた昭和の年数より、平成のほうが長くなっている。社会や生活がデジタル技術によって一変した時代でもあつた。次はどんな時代がやってくるのだろうか。(関)

◎所属する日本建築写真家協会の 20 周年行事、銀座通りのパノラマ写真撮影と銀座裏路地スタッフ撮影も大詰めを迎える、「銀座」でイメージ撮影場所の撮り溜めをしたところや、3 月の東京マラソン時の銀座通り風景を加れば、概ね写真撮影は終了です。写真集と写真展の構成がこれから課題で、まだまだ悩ましい状況です。(小野)

◎あと少しで平成が終わる、新しい元号を迎えることになります。子どもの頃「明治生まれ」と聞くと果てしなく遠い昔という思いを抱いたのですが、あと 10 年ほどしたら「昭和生まれ」のように見られるのでしょうか。我が國固有の時代の区切りではありますが、生きている間に二度目の改元となると、やはりどうしても意識してしまいます。そしてこの会報も、昭和>平成>新元号と三つの時代を跨ぐことになります。(小城)

◎今年から毎年春に開催されるはずだったフォトキナだったが、昨年末に中止が発表された。半年後に、同規模のイベント開催は難しいといふ主催者の意見のようだ。そのせいもあってか、年明けから CP+ に向けた各社の動向が慌ただしくなっている。さて、今年の CP+ はどんなものになるのだろうか。悲願の来場者 7 万人を達成できるかどうかも気になるところだ。(柴田)

◎昨年末、2011 年から続いている東日本大震災被災地定点撮影を行きました。被災地の見た目の復興はだいぶ進んでいます。その中で、気になるのが高い防潮堤です。昨年はその北端、青森県と岩手県の県境まで行って来ました。建設前から何かと指摘されている防堤ですが、目に見えるようになると、これで良いのかと思ってしまいます。(伏見)

◎複数の最新スマートフォンを触れる機会に恵まれた。いずれもカメラ機能に特色のある人気機種。残念ながら、そのなかに国産メーカーは不在。スマートフォンは「カメラとしての腕前」がないため、複数レンズを搭載した技術や画像加工など、攻めてくるところが高レベルで斬新。職業にしていると、機材は守りに入りがち。新しいモノも見ないね!(桃井)

◎年始に、死ぬまでにやっておきたい 10 のことを書き出してみた。今年の目標はスーパーカーで日本縦断。人を撮りながら北海道から沖縄までバイクでゆっくりと走りたい。恐る恐る妻に相談すると、「そんなことを言つたってその間、子どもの習い事の迎えはどうするの?」と一蹴。男のロマン、女の不満。現実は厳しい。作戦実行にはまだまだ時間がかかりそう。(山縣)

日本写真家協会会報 第170号(年3回発行) 2019年2月20日 印刷・発行 ◎編集・発行人 熊切圭介

URL <https://www.jps.gr.jp/> Email info@jps.gr.jp 本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます

頒布 1 年・3 回 3,500 円(消費税・送料共込)

出版広報委員 桑原史成(理事)、小池良幸(理事)、飯塚明夫(委員長)、池口英司(副委員長)、小野吉彦、川上卓也、小城崇史、柴田 誠、関 行宏、伏見行介、桃井一至、山縣 勉

発行所 公益社団法人日本写真家協会 (JPS)

〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地 JCII ビル303 電話 03(3265) 7451 (代表) FAX 03(3265) 7460

印刷所 株式会社光邦

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 3 丁目11番18号 飯田橋 MK ビル 電話 03(3265) 0611 (代表)

Topics

Awarded, "The 14th Yonosuke Natori Photographic Prize" and "The 2nd Tsuneko Sasamoto Photographic Award"

Japan Photographers Society (JPS) awarded "The 14th Yonosuke Natori Photographic Prize" and "The 2nd Tsuneko Sasamoto Photographic Award" on December 12, 2018, at Arcadia Ichigaya, Chiyoda-ku, Tokyo.

The 14th Yonosuke Natori Photographic Prize was given to Mr. Yusuke Suzuki's "The Costs of War". The "Yonosuke Natori Photographic Encouragement Prize" was given to Miss Misao Yadokari's "Yoake-mae", translated as "Before Dawn". Those two winners received awards and prizes. For the Photographic Prize "The Costs of War", the judge praised the reason of the award as "The work filmed with a firm eye of photo-journalism. A lot is told from the subjects". The winner Mr. Suzuki said "About the meaning of the war, I constructed the influence of war on human society by photographs. I assume that only photographs can express the situation of the war in the modern world and the war in the hi-tech military industries". Miss Yadokari's "Yoake-mae" focused on her sister who became mental disease. The judge praised "With breaking her heart, the photographer told her story by photographs". Miss Yadokari

was absent on that day and her proxy commented that "The work themed about mental disease that has taken away many people's lives. We need to see that things not to see because it is too close, and also we need to see that things what we do not want to see".

Following the Natori prize, "The 2nd Tsuneko Sasamoto Photographic Award" was given to Mrs. Kimie Adachi. She focused on the stories of Cambodian children. The judge Mr. Makoto Shiina praised the reason of the award as "Very impressed pictures. The Severe era of Cambodia was the background. By the female's eyes, she expressed the situation that the people entrust the future to the local children". Mrs. Adachi said "I feel great. I have photographed one by one for long time in Cambodia. When I first arrived on Cambodia, I photographed children worked in ruins and markets with shining eyes. After, I knew the fact of the sacrifice of human trafficking that has taken away their lives. I asked myself again and again that I should continue to photographs or not. But I have believed the power of the photographs. The work was made not only by me. I would like to follow the Tsuneko Sasamoto's spirits".

By Naoki Wada, Director, International Relations

About the Japan Professional Photographers Society

The Japan Professional Photographers Society was established in 1950. Through its activities it strives to define the role of the professional photographer and secure copyright protection while working to develop photographic culture. In 2001 it received recognition as an Incorporated Body from the Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology, in March 2011 it was officially recognized as being a Public Interest Incorporated Association by the Prime Minister's office, and since April 1 of that year it has been active under the title, Japan Professional Photographers Society, Public Interest Incorporated Association.

Since its foundation, the society has succeeded in receiving an extension for the period of copyright protection (to 50 years after the death of the artist), held numerous exhibitions concerning photographic history and expression (A Century of Japanese Photography, History of Japanese Contemporary Photography, Sixty Years of Japanese Children, Women, etc.), and published numerous books on photographic history and collections of photographs. In order to contribute to the promotion and development of photographic culture, it holds the JPS Exhibition as an open exhibition, presents a nationwide Photography Study Pro-

gram for elementary school students, the Photo Forum that aims to develop photographic expression, Digital Photography Lectures for the advisors of high school photographic clubs, and presents the Yonosuke Natori Photographic Award to uncover and foster new talent. At the same time, it carries out a wide range of activities to contribute the development of photographic culture, such as: cultural exchange with overseas photographers, PR through publishing and information dissemination via the Internet.

Furthermore, it presents the Japan Professional Photographers Society Award in recognition of individuals or organizations who have achieved notable achievements in the development of photographic technology, education, or critique.

The Japan Professional Photographers Society has devoted itself to the establishment of photographic museums, such as the Tokyo Metropolitan Museum of Photography, and is currently actively working towards the creation of the 'Japan Photographic Preservation Center' (archive) for the collection and preservation of original photographs.

Japan Professional Photographers Society

JCII Bldg. #303, Ichibancho 25, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0082

Tel: +81-3-3265-7451 Fax: +81-3-3265-7460

E-mail: info@jps.gr.jp Web site: <http://jps.gr.jp/int/index-e.html>



写真家に知っておいていただきたい著作権のこと。

あなたが写真を撮った時に、
写真の著作権はあなたの**財産**となります。
そのためにはなんの**登録**も必要としません。

あなたの写真は、著作権というとても**強い権利**で、
あなたの**死後も70年間にわたって**守られますが、
著作権を**譲渡する契約**によって撮影された写真は、
その権利を**失い**、回復することは**困難**です。

写真家はでき得る限り、
「写真の著作権を保持するべきだ」
と私たちちは考えています。

写真著作権を大切に。

一般社団法人日本写真著作権協会(JPCA) 〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 JCIビル 4階 Mail: info@jpca.gr.jp

〔正会員団体〕 公益社団法人日本写真家協会／公益社団法人日本広告写真家協会／一般社団法人日本写真文化協会／日本肖像写真家協会
一般社団法人日本写真作家協会／全日本写真連盟／一般社団法人日本スポーツプレス協会／日本自然科学写真協会
日本風景写真協会／公益社団法人日本写真協会 (以上、10団体)

この広告は、公益社団法人日本複製権センターからの分配金による公益事業の一環として制作されています。



HORIUCHI COLOR
FINE ART PRINT SERVICE

デジタル銀塩プリントを極める ネットdeザ・プリント

銀塩の表現力を最大限に活かしたラムダプリントで、作品表現に最適な組み合わせが選べ、ドライマウント・マットパネル・アルミフレームのパネル加工も同時に注文できます。

プリント

- ペーパー：コダックプロ、メタリックの2タイプ
- サイズ：六ツ切～B1までの19タイプ
- フチ取り：白フチ、黒フチ、フチなしの3タイプ

パネル加工

- 高級アルミフレーム
(額縁/シルバー、ブラック)
- マットパネル（オフホワイト、ブラック）
- ドライマウント

銀塩フォトブックを極める ネットdeザ・フォトアルバム

多彩な編集機能と仕様でさまざまな用途に合わせ、表紙はハードとソフト、本文は高品質銀塩写真、見開きはフルフラット仕様の製本で高級感溢れる銀塩フォトブックができます。

《PRO》シリーズ

- 高級写真タイプ：銀塩光沢印画紙+液ラミ
- サイズ / ページ：160SQ、A5、197SQ、A4
10～50p
- カバー：ソフト（ブックケース付）
ハード（くるみ表紙）

《ENJOY》シリーズ

- 高級精細印刷タイプ：表紙 / マットPP加工
- サイズ / ページ：200SQ、A4 / 20～50p
- カバー：ソフト（並製本）、ハード（上製本）

インクジェット・プリントを極める ファインアート・プリントサービス

作品イメージを極限まで表現した「ファインアート・プリント」を国内外有数の7種類のアーティスト用紙でご提供します。

それぞれの個性と美しさをお楽しみください。

繊細さと優雅さが特長の

《ハーネミューレ・ファインアート》

- ファインアート・パライタ／フォトラグ

インクの重なりが表情豊かに仕上げる

《ヴァンヌーボ》

- ファインアート・ヴァンヌーボ SW

シャープネス、画像再現性に優れた

《イルフォード・ファインアート》

- ゴールドファイバーシルク／
ゴールドコットンスムース

柔らかで優しい印象に仕上げる

《伊勢和紙 Photo》

- 雪色／芭蕉

個展・グループ展などの開催を受付けています



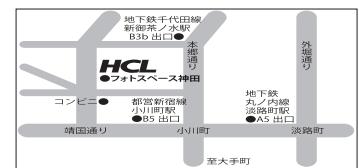
HCL フォトスペース神田

東京都千代田区神田小川町2-6-14 ☎03-3295-2191
 ●平日=9:00～18:00 ●第1・3・5土曜=9:00～17:00
 ●最終日=9:00～16:00
 ●休館日=第2・4土曜・日曜・祝日・年末年始
 ●都営新宿線「小川町駅」B5出口より徒歩5分



HCL フォトギャラリー名古屋

名古屋市中区錦1-11-20 大永ビルディング 2F ☎052-211-6151
 ●平日=9:00～18:00 ●土曜=9:00～17:00
 ●最終日=9:00～13:00 ●休館日=日曜・祝日・年末年始
 ●地下鉄鶴舞線・東山線「伏見駅」10番出口より徒歩1分



株式会社 堀内カラー

トイメーディングセンター（トイアート）
東京都千代田区神田小川町2-6-14 ☎(03)6854-9581
 フォトイメーディングセンター
東京都渋谷区神宮前3-41-6 ☎(03)3479-5351

名古屋営業所

名古屋市中区錦1-11-20 ☎(052) 211-6151
 関西営業部
大阪市北区万歳町3-17 ☎(06) 6313-2351

Canon

make it possible with canon

STABILIZER
ON ■ OFF

AF MF

写真は進化する。

写真の理想とは何か。私たちキヤノンは、答えを持っていません。写真を撮る人、それぞれの理想が違うからです。一つ一つの理想を叶えるために、どんなシステムが必要なのか、その一心で開発を続けてきました。30年を超えるEOSシステムの歴史もまた、挑戦の連続でした。映像表現の可能性を切り拓くのはEOSでなければいけない。そのプライドと強い意志が、私たちの原動力でした。EOSの挑戦は終わっていません。その証明が新マウントを採用したEOS Rシステムです。キヤノンの光学技術を最大限に発揮させることができる、EOSの新しい選択肢。それは、表現領域を限りなく拡張させ、想像の限界を突破する力。理想を叶える力。みなぎる力を手に入れた時、あなたの写真は、進化する。

EOS R SYSTEM
NEW EOS R NEW RF LENS



◎キヤノン EOS R ホームページ

canon.jp/eos-r



◎キヤノンお客様相談センター

デジタルカメラ・
交換レンズ

050-555-90002

受付時間(平日・土)9:00~17:00(1/1~3/12/31および日・祝は休ませていただきます)
※海外からご利用の方、または050からはじまるIP電話番号をご利用いただけない
方は043-211-9556をご利用ください。※受付時間は予告なく変更する場合があります。
あらかじめご了承ください。

カタログは、canon.jp/catalogからダウンロードしていただくか、ハガキの場合は、住所、氏名、電話番号を明記の上、〒261-8711千葉県
千葉市美浜区中瀬1-7-2 キヤノンマーケティングジャパン(株) カタログ請求「EOS R」係までお送りください。※カタログ請求を通じ
てお客様より任意でご提供いただいた個人情報は、カタログ送付の目的のみに使用いたします。

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

SP15-30mm F/2.8 VC G2

NEW

高画質の頂きを求めて。

抜けるようにクリアな描写。

レンズの潜在力を引き出す高精度AFと手ブレ補正。

生まれ変わる渾身のフラッグシップ。

SP 15-30mm F/2.8 Di VC USD G2 (Model A041)

キヤノン用、ニコン用

Di:35mm判フルサイズおよびAPS-Cサイズ相当デジタル一眼レフカメラ用レンズ



TAMRON

www.tamron.co.jp



次世代の創造へ。新次元の光学性能 Zマウントシステム。



Z 7 NEW

NIKKOR Zレンズの真価を実感できる高画素モデル

有効画素数4575万画素、ISO 64-25600、4K UHD動画

Z 7 ボディ Z 7 24-70 レンズキット 内容：Z 7・NIKKOR Z 24-70mm f/4 S Z 7 FTZ マウントアダプターキット 内容：Z 7・マウントアダプター FTZ
 Z 7 24-70+FTZ マウントアダプターキット 内容：Z 7・NIKKOR Z 24-70mm f/4 S・マウントアダプター FTZ

Z 6 ボディ Z 6 24-70 レンズキット 内容：Z 6・NIKKOR Z 24-70mm f/4 S Z 6 FTZ マウントアダプターキット 内容：Z 6・マウントアダプター FTZ

Z 6 24-70+FTZ マウントアダプターキット 内容：Z 6・NIKKOR Z 24-70mm f/4 S・マウントアダプター FTZ

価格：いずれもオープンプライス。記録媒体は別売です。

Z 6 NEW

高感度性能にも優れたオールラウンドモデル

有効画素数2450万画素、ISO 100-51200、4K UHD動画

CAPTURE TOMORROW

1.1億本
NIKKOR



ニコンカスタマーサポートセンター
0570-02-8000

www.nikon-image.com

一般電話からは市内通話料金でご利用いただけます。営業時間9:30~18:00(年末年始、夏季休業等を除く毎日)●ナビダイヤルがご利用いただけない場合は、(03)6702-0577におかけください。●ファクシミリでのご相談は、(03)5977-7499へご送信ください。

株式会社ニコン・株式会社ニコンイメージングジャパン

“フルサイズのK”は、 Mark IIへ。

高解像と高感度の高いレベルでの両立

- PRIME IV & アクセラレーターユニット
- 有効約3640万画素
- 最高ISO 819200
- リアル・レゾリューション・システムII

PENTAX

K-1 II

主な
機能

- 35ミリフルサイズイメージセンサー
- ローパスセレクター
- 5軸5段のボディ内手ぶれ補正機構SR II
- 防塵・防滴構造
- アストロトレーサー
- フレキシブルチルト式液晶モニター 等

どんな作品も、作り出せる品質がある。

EPSON ULTRACHROME
K3 INK
A3ノビ対応プリンター
SC-PX7VII
オープンプライス



EPSON ULTRACHROME
K3 INK
A2ノビ／17インチ幅ロール紙
対応プリンター
SC-PX3V
オープンプライス
*ロール紙ユニットは、オプション対応となります。

EPSON ULTRACHROME
K3 INK
A3ノビ対応プリンター
SC-PX5VII
オープンプライス



Epson Proselection

エプソンプロセレクション

日常をプレミアム画質で手軽に楽しむ。

Epson ClearChrome
K2 INK



A4対応複合機
EP-30VA
オープンプライス



A3対応複合機
EP-10VA
オープンプライス



A3ノビ対応プリンター
EP-50V
オープンプライス

Colorio **V-edition**

*出力物はイメージです。*写真はハモニカ合成です。*オープンプライス商品の価格は取扱販売店にお問い合わせください。*この広告に記載の仕様、デザインは2018年6月現在のものです。技術改善等により、予告なく変更する場合がありますので、予めご了承ください。下記電話番号はKDDI株式会社の電話サービスKDDI光ダイレクトを利用しています。下記電話番号がご利用いただけない場合は、携帯電話またはNTT東日本・NTT西日本の固定電話（一般回線）からお問い合わせください。かっこ内の番号にお問い合わせ下さい。ようお願いいたします。

[SC-PX 3V・SC-PX5VII] **KDDI光ダイレクト** 050-3155-8100 (042-585-8444) [SC-PX 7VII] **KDDI光ダイレクト** 050-3155-8011 (042-589-5250) [インフォメーション] **KDDI光ダイレクト** 050-3155-8100 (042-585-8444) [インフォメーション] **KDDI光ダイレクト** 050-3155-8011 (042-589-5250) [インフォメーション]

ご購入はお近くの販売店 または エプソンダイレクトで検索 » お電話でも **0120-956-285**



プラグインでプリント操作を簡単に ～Epson Print Layoutのご紹介～

エプソンでは、インクジェットプリンター製品をより一層活用していただくために、さまざまなユーティリティ・ソフトウェアを提供しています。そのひとつがAdobe® Photoshop®などの画像処理ソフト用のプリント・プラグイン「Epson Print Layout」。作品制作にも使える便利なプラグインの特徴を紹介します。

◆ Windows®とMacの両環境に対応

Epson Print Layoutは、Adobe® Photoshop®、Adobe® Lightroom®、ニコン ViewNX-i、または市川ソフトラボラトリー SILKYPIX®で作動するプラグインで、レタッチや閲覧した画像を思い通りにプリントすることを目的に開発されました。Microsoft® Windows®環境とmacOS環境の両方に対応しています。

それぞれの画像処理ソフトウェアからでもプリントはできますが、Epson Print Layoutを使うと、使用するアプリケーションやプリンターが違っていても同一のユーザーインターフェイスで、レイアウト調整や各種設定などがより手軽になります。主な機能を紹介しましょう。

(1) 割り付け機能(図1)：作品をプリントする際のレイアウトを設定できます。プリント時のトリミング、余白や余黒などの設定、複数写真的割り付けなども可能です。画像サイズ(ピクセル数)や解像度(dpi)などを気にすることなく、仕上がりサイズとして設定できるのがポイントです。割り付けたテンプレートは保存できるため、統一したレイアウトでの作品作りに便利です。

(2) プレビュー機能(図2)：モノクロ写真モードでプリントする場合の「色調」(純黒調、冷黒調、温黒調、セピア)と「調子」(より硬調、硬調、やや硬調、標準、軟調)のプレビューができます。カスタマイズした設定は保存も可能です。カラープリントに対しては、簡易ソフトブルーフ機能によって、「知覚的」と「相対的」のカラー・マッチングのプレビューができます。

(3) カスタムメディア登録：ICCプロファイルと用紙設

定の組み合わせを登録できます。登録した設定は用紙選択画面に表示されるため、たとえばサードパーティー製の用紙を使う際に毎回設定する手間が省けます。

(4) ギャラリーラップ機能：厚みのあるパネルをプリントで包み、パネル端面に作品の一部を見せて立体感のある作品を生み出す「ギャラリーラップ」手法に適したプリントが可能です。端面に対して、なし、塗りつぶし、鏡像、鏡像(ぼかし)、画像で覆う、画像で覆う(ぼかし)という6種類のエフェクトを指定可能。もちろんパネル厚さ(端面の幅)も設定できます。

(5) パノラマレイアウト機能：ロール紙を使って縦長または横長作品を制作する際のレイアウト設定が簡単にできます。また、ロール紙のフチなしプリントも可能です。

◆手軽で効率的な作品作りを実現

Epson Print Layoutはエプソンのウェブサイト^[*1]で無償で提供しています。まずははじめにインストーラ・ファイルをダウンロードし、手順に従ってインストールします。

Adobe® Photoshop®で使う場合は、Adobe® Photoshop®を起動し、プリントする画像データを開いた状態で、[ファイル]メニューから[自動処理] > [Epson Print Layout...]を選択します(図3)。

Epson Print Layoutの画面が開いたら、[プリンター設定]、[レイアウト設定]、[カラー設定]のそれぞれを設定し、最後に[印刷]をクリックしてプリントは完了です。メニューとユーザーインターフェースは直感的に分かるようにデザインされていますので、使い方は

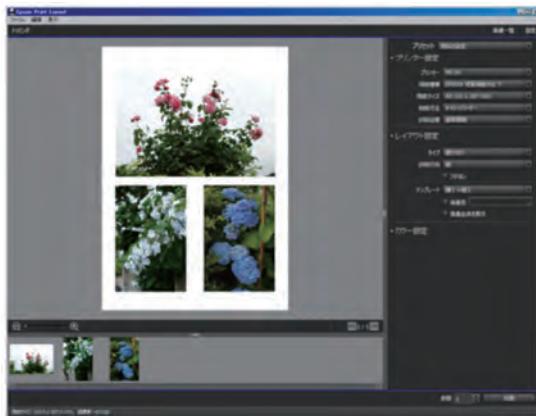


図1. A4 縦サイズに横1点+縦2点をテンプレートとして作成し、3点の作品を割り付けた例

簡単です。

割り付けプリントやギャラリーラップ・プリントは Adobe® Photoshop®などでももちろん可能ですが、Epson Print Layout を使ったほうが簡単で作業効率を高められます。作品作りのひとつのツールとしてご活用ください。

[*1] Epson Print Layout

<https://www.epson.jp/printlayout/>

◆ユーティリティソフトを無償で提供

エプソンでは、Epson Print Layout 以外にも、コンタクトシート（サムネール）を含む写真のプリントが簡単にできる「E-Photo」、CD や DVD のラベルを簡単に作れる「EPSON Print CD」、Web ページをスムーズにプリントする「E-Web Print」、Microsoft® Office のドキュメント印刷に適した「かんたん設定 for Office」、カラーキャリブレーション用のカラーチャートを印刷する「Epson ColorBase2」[*2]などを無償で提供しています。

エプソンのインクジェットプリンターのユーザーでも、そうしたユーティリティは使ったことがない、あるいはそもそも存在を知らない、といった方も多いのではないかと思いますが、それぞれ便利な機能が搭載されていますので、ご興味を持っていただければ幸いです。

[*2] 対応プリンター：SC-PX3V、SC-PX5V2

(注)：Adobe、Photoshop は、Adobe Systems

Incorporated の登録商標または商標です。

(注)：Mac、macOS は、Apple Inc. の商標です。

(注)：Microsoft、Windows は、米国 Microsoft Corporation の、米国、日本およびその他の国における登録商標または商標です。

(注)：SILKYPIX は、株式会社 市川ソフトラボラトリの登録商標です。

(注)：Wi-Fi Direct は、Wi-Fi Alliance の登録商標です。



図2. モノクロ写真モードでのプレビューで、「温黒調」を選択した例



図3. Adobe® Photoshop®では【自動処理】メニューから起動が可能





樹形に魅せられて——宮沢あきら
FUJIFILM X-T3 XF8-16mm F2.8 R LM WR



19歳——横山 聰

FUJIFILM GFX50S 110mm F2.0



軌跡——池之平昌信

FUJIFILM X-T2 XF100-400mm F4.5-5.6 R LM OIS WR

この中判ミラーレスと、
歩いていく。

FUJIFILM
Value from Innovation



フォトグラファー | 原 貴彦 TAKAHIKO HARA

中判サイズの大型センサーを
搭載しながらも、驚異の軽量化を実現。
超高画質と機動性を兼ね備えた
FUJIFILMのGFX 50R、誕生。
中判カメラは重い——
そんな常識は過去のものになる。

GFX 50R

35mmフルサイズの約1.7倍の
大型センサーを搭載した
中判ミラーレスデジタルカメラ
「GFXシリーズ」に
レンジファインダースタイル、
最薄部46mm、質量775gの
小型軽量ボディモデルが登場。



中判デジタル
「FUJIFILM GFX
50R」の開発

および製品化に対して

●5140万画素「FUJIFILM Gフォーマット」イメージセンサー ●高速画像処理エンジン「X-Processor Pro」
●フォーカスポイントを瞬時に操作できるフォーカスレバー ●防塵・防滴・-10°Cの耐低温性能 ●Bluetooth対応

<http://fujifilm-x.com/ja/>



Photo Haruki